会報
特攻
平成23年11月

第89号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒105-0014　東京都港区芝2-5-19TAビル
電　話　03（5730）1016
ＦＡＸ　03（5730）1017
http://www.tokkotai.or.jp

振替口座　00140-6-59580
編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

第60回特攻平和観音年次法要

日　時　平成23年9月23日（木）14時～15時10分
場　所　世田谷山観音寺・特攻平和観音堂
参列者　御遺族35名、御来賓・会員等約210名、他に当日受付の一般参列者50数名、合計約300名

世田谷山観音寺・特攻観音堂

年次法要会場・御遺族御来賓席

式次第

司会　及川　昌彦
梵鐘点打　三回　倉形　寛
式衆入堂　世田谷山観音寺山主他
駒繋神社宮司
国歌斉唱　トランペット　田櫓　雅之
山主願文　特攻平和観音経
世田谷山観音寺山主　太田　賢照
神　儀　駒繋神社宮司　澤田　浩治
修祓の儀・降神の儀・献饌の儀
祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀
祭文奏上　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃
挨　拶　世田谷区長　保坂　展人
献　吟　一誠流　石橋　一歌
笛　逢坂　龍信
献　歌　世田谷コールエーデ合唱団
指揮　大穂　孝子
「ふるさと」「翼をください」
奉納献奏「海ゆかば」
トランペット　田櫓　雅之

献吟

石橋　一歌
笛　逢坂　龍信

護国隊　宮田　淳作
昭和十九年十二月七日
オルモック湾で戦死
敷島の大和男子（おのこ）の行く道は
唯大君の任（まけ）のまにまに

金剛隊（イ36潜）都所　静世
昭和二十年一月十二日
ウルシー海域で戦死
君がため死すべき秋（とき）に生まれける
己が命をなど惜しむべき

目次

第60回特攻平和観音年次法要…1
自衛隊は最後の砦となれるか
東日本大震災の教訓……8
8月15日の靖國神社……10
日本の歴史と危機管理―日本は
まあ助けられたか―……13
義烈空挺隊碑前祭……18
香取基地慰霊祭に参加して……19
高野山「空」の碑と慰霊祭……20
私の戦争体験記……22
特集・特攻インタビュー（第6回）
陸軍航空特攻　堀山久生氏……25
東日本大震災で活躍した自衛隊を
讃える長歌（七五調）と短歌……39
東日本大震災で知る「大御心」……39
「劇団エアースタジオ」公演……40
特攻隊員の母親役を演じて……40
特攻隊から学ぶ今……41
「粟野敦子・創作人形展」
について……42
人形に籠めた慰霊の心……43
海軍第14期飛行予備学生に聴く
―聞いておこう薄れゆく
戦争の記憶―……45
近現代史研究会（PandA会）
に参加してみませんか？……45
寄附金に関する税額控除制度
について……47
事務局からの報告等……47

サキソフォン　鈴木　隆春
全員合唱「海ゆかば」
ラッパ献奏　陸軍衛兵隊・海軍衛兵隊
焼　香　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
名誉会長　山本　卓眞
理事長　杉山　蕃
御遺族各位
御来賓各位
会員・一般各位
式衆退堂
池前にて、住職　読経（般若心経）
神官　修祓・祝詞奏上後、式衆退場
直　会　15時30分～16時30分

第60回特攻平和観音年次法要

平成23年9月23日（金）秋分の日、世田谷山観音寺・特攻平和観音堂において、第60回特攻平和観音年次法要が厳かに齋行された。第60回ということは、昭和27年5月5日、東京都文京区音羽の護国寺において、旧陸海軍関係者を中心に二体の「特攻平和観音像」（海軍は「神風（しんぷう）特攻平和観音像」と称していた。）の合同開眼法要が営まれて以来60回目の年次法要ということであって、特攻平和観音奉戴以来59年、特攻平和観音像制作以来60年の節目の年に当たる。

本像は、終戦後、静岡市の清水寺住

祭　文

本日ここ世田谷山観音寺において御来賓の皆様の御臨席と御遺族、戦友の皆様の御出席を頂き、第六十回特攻平和観音年次法要を斎行するに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。

戦いが終わり、既に六十六年余の歳月が流れました。この間皆様が全てを擲って支えんとされた我が国の生存と繁栄は、戦友、朋友、同輩の方々の御努力により、奇跡と言われた見事な復興・発展を成し遂げ、富貴・豊饒の世を作り上げて参りました。しかしながら、驕れる者久しからず、大戦前後の苦衷を知り尽くした年代の老齢化とともに、我が国は相対的に、世界的な地位を失い、大変な難局を迎えつつあります。またこの間、我が風土、民族が営々と築き上げてきた誇るべき風習・社会規律を失い、軽薄・刹那的快感を求める憂うべき社稷に成り下がってきたことも残念ながら事実であります。

加えて本年三月十一日、我が国は東北太平洋沿岸を中心に、未曾有の大震災の被害を受けました。のみならず、原子力発電所事故による大規模な放射線被害という二重の大災害に見舞われ、復旧は遅々として進まぬ状態であります。この大惨事を天の一槌と捉え、国民等しく原点に立ち返って、今後の我が国は如何にあるべきかを真摯に検討すべき機会を得たと捉えるべきであります。然るに、目前の対応、功利・功名、党利・党略に追われ、確たる復興の旗色が未だ鮮明ならざる残念な状態にあります。こんな時こそ、六十六年前、先輩達が味わわれ、究極の行動に至った情勢を、そしてその心情を忖度し、今一度我々は奮い立ち、世界に誇れる復興を成し遂げなければなりません。顧みれば、我々人類の壮大な歴史は、一に自然の克服、災害との戦いの連続であり、これを乗り越える努力の過程で進歩を続けてきたものであることに想いを馳せる必要があります。来年の法要には、これらを踏まえた、明るい報告が出来ればと心より祈念するものであります。どうか在天の皆様方、絶大な御加護を賜らんことをお願い申し上げる次第であります。

また本年は、英霊方の慰霊奉賛の体制に変化がありました。公益法人制度改革により、我々の組織は、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会として新しく出発致しました。また、長年にわたり重任を果たして参られた、山本会長、菅原副会長は、それぞれ名誉会長、顧問に御就任、理事長以下新しい布陣で業務を継承することとなりました。英霊の皆様、生存された戦友の方々は戦後の混乱の中、皆様の御意志を継いで雄々しく立ち上がり、奇跡と言われる我が国の復興の中核として、見事な活躍をされました。そしてその傍ら、戦友の御霊を弔い、その供養に誠心誠意尽くしてこられました。そのお姿は、私共後輩に当たる者共に深い感銘を与え続けてこられました。そのお姿そしてそのお心は、長く伝えられるべき美しさであります。私共後輩に当たる世代は、奉賛に尽くされた諸先輩の長年のお勤めに対し衷心より敬意を表するとともに、今後ともその努力を継承致しますことを改めてお誓いし、祭文とさせて頂きます。

平成二十三年九月二十三日
公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃

職吉井成純僧正と日光山輪王寺塔頭華厳院住職関口直大僧正が、大東亜戦争全戦没者の霊魂成仏を発願し、法隆寺に願い出て秘仏「夢違観音像」を一尺八寸に縮小した像を制作し、平和観音像として奉戴することの許可を得、昭和25年10月10日に平和観音会を発足させ、会の趣旨に賛同する者にこれを頒布し回向することとしたが、現存が確認されているものは、本特攻観音堂の二体と、鳥濱トメさんによって知覧の特攻平和観音堂に奉安された一体、及び昭和21年から平成18年まで61回にわたり長年執り行われてきた海軍神風特別攻撃隊戦没者の慰霊法要「神風忌」が営まれていた東京都港区芝の増上寺塔頭安蓮社に奉安されている一体の計四体である。

陸海軍各一体の特攻平和観音像は、昭和26年5月、先代の太田睦賢僧正により開山された世田谷山観音寺境内に都下仙川に在った元華頂宮邸の持仏堂を移築、特攻観音堂とし、昭和31年5月18日に落慶法要を営んで以来毎年法要を行っており、護国寺での開眼法要以来通算して今年、第60回目の年次法要を斎行することとなっ次第である。

なお、世田谷山観音寺では毎月の18日、特攻観音堂において有志による内輪の月例法要を営んでいる。そして、大規模な年次法要は、毎年秋分の日の9月23日に営んでいるものである。

ところで、今年も直前までは台風の接近により、昨年同様雨中の年次法要になるかと案じられたが、九州南方洋上を迷走の挙げ句、俄かに進路を変えて本土に接近し、紀伊半島や名古屋市周辺に大風水害をもたらした台風15号が、予報に反し、風足を早めて前日に関東東北を縦断したため、この日は、台風一過の日本晴れとまではいかないものの、秋のお彼岸らしい爽やかな天気に恵まれた。

この年次法要は、4年前から、山主太田賢照僧正の提唱により、神仏習合で行われているが（詳しくは、平成19年11月発行の当会会報『特攻』第73号2頁以下参照）、今や、すっかり定着した感がある。

なお、神仏習合に関しては、平成21年11月発行の当会会報『特攻』第81号（2頁）に掲載したように、平成21年6月11日、高野山真言宗総本山金剛峯寺金堂において、近畿7府県の有名151社寺でつくる「神仏霊場会」（会長＝森本公誠・東大寺長老）の主催で「神仏合同国家安泰世界平和祈願会」が盛大に齋行されて以来、定例法要として年に1度、祈願会を催し、寺院と神社で交互に法要を営むことになったとのことであり、同会は、明治維新の際、神仏分離による廃仏毀釈運動の起こる以前は盛んであった、神仏を一緒に崇拝する精神風土を取り戻そうと、平成20年3月に設立され、世界平和運動の一環として、この運動を進めているとのことであり、この傾向は、今後ますます盛んになるものと思われる。

そこで、先ず午前中に、地元の氏神「駒繋神社」に参詣した。駒繋神社は世田谷山観音寺の北東約400メートルの下馬4丁目に鎮座まします古社で、昔から付近一帯の鎮守様として尊崇されている。

御祭神は、大国主命、又の名を子の神、子の明神とも言い、五穀豊饒の神であるとともに、源氏ゆかりの武運の神でもある。その謂れは、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子が奥州征討に当たって武運を祈願され、その後、頼朝公もまた、藤原氏征討に際して、武運祈願のため参詣され、愛馬芦毛を社前の松に繋いだという故事に由来する（詳しくは、平成19年11月発行の当会会報『特攻』第73号4頁以下参照）。

下馬5丁目でバスを降り、公園横の表参道より、鮮やかな朱塗りの神橋を渡って入ろうとしたが、この度の台風で老木の枝が折れ、落ちかかっていて危険なため、石段の男坂も坂道の女坂も通行止めとなっていたので、大回りをして丘の上の裏門から参入することになった。しかし、境内も御社も、いつものとおり、森厳の気に包まれ、如何にも由緒ある古社の佇いを見せていた。古来武士達が出陣に際し、武運を神に祈願した、その心情と決意の程がひしひしと伝わってくるような感じさえする。境内の「駒繋之松」は五代目とあるが、高さ20メートルはあろうかという黒松の大木である。境内は実に綺麗に掃き清められていて、参詣者の心を引き締めてくれる。そういった雰

梵鐘点打

杉山蕃理事長・祭文奏上

囲気のある古い御社である。

駒繋神社に詣でて身も心も清めた後、世田谷山観音寺に向かう。

世田谷山観音寺の境内は、これまた松や欅、楓などの屋敷林に囲まれ、林間に苔むす古い堂塔の見え隠れする静寂・森厳の気に包まれている。その境内には、会員を始め沢山の奉仕の方々によって早くも受付等の準備が整っていた。そして、法要開始のかなり前には早くも境内は、久々の再会を喜び合う元戦友達を始め、老若男女大勢の参詣者で活気づいてきた。

平成19年の今日、第56回特攻平和観音年次法要に先立って開眼除幕式が行われた「特攻勇士之像」も、本山表門脇の代官屋敷前に、奉納された沢山の千羽鶴に飾られ、凛々しく輝いて御座します

本堂脇の特攻平和観音堂正面の祭壇には、菊や蘭や竜胆など沢山の季節の生花が供えられ、香が焚かれ、寺域中央の蓮池には、大きな緋鯉真鯉が悠然と泳いでいる。池中に立つ大慈大悲の観世音菩薩（法隆寺夢殿の夢違い観音像を模して鋳造された菩薩像―その胎内にも、特攻平和観音像の胎内に納められている特攻勇士の霊璽簿の写しが納められているという）が、慈悲慈愛の眼を注いで、特攻勇士達の御霊と御遺族を始め参会の衆生をやさしく見守り給う中、やがて14時定刻に、法要は始められた。

山主、神官らの入堂に始まり、梵鐘三打、故野口清三会員に替わって昨年から航空自衛隊幹部の倉形寛会員が真心を込めて撞く梵鐘の音は、余韻嫋々として樹間を流れる。また、司会も世代交代により二回りも若い及川昌彦評議員が務めることとなった。

先ずは一同起立して国歌斉唱、山主願文奏上と続く。

祭主世田谷山観音寺太田賢照山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え、「特攻勇士の諸霊は正に忠烈の亀鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや・・唯、諸霊を慰め得るもの一つあり、宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔（ひっちゅう）するもの果たして他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり・・嗚呼尊い哉、嗚呼仰がんか哉、長存不滅の光。南無特攻平和観世音菩薩・・」と、言を極め、心魂を傾注して奏上された。真に特攻勇士は、護国の鬼神となって散華され、今や平和守護の観世音菩薩となって我ら衆生を見守っておられるのである。

この後、駒繋神社の澤田浩治（くにはる）宮司祭主となって神儀が執り行われ、修祓の儀・降神の儀・獻饌の儀・祝詞奏上・玉串奉奠等の式典が、厳かな神楽舞曲の流れる中、清らかに齋行された。

続く祭文奏上（祭文は後掲）の中で、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会の杉山蕃新理事長は、現下の国内外の情勢に見る危惧すべき状況に触れつつ、また去る3月11日に発生した未曾

国歌斉唱

太田賢照山主・願文奏上

澤田浩治宮司　祝詞奏上

献吟・吟　石橋一歌　笛　逢坂龍信

有の大震災と原発事故による大規模な放射線被害による二重の大惨事を天の一槌と捉え、国民等しく原点に立ち返って今後我が国は如何にあるべきかを真摯に検討すべき天与の機会として今一度奮起して世界に誇れる復興を成し遂げねばならない、また、今年は、当顕彰会が公益財団法人として認定されたのを機に、役員等の世代交代がなされたが、これまで献身的に慰霊顕彰業務を担って来られた先輩方の御意志を継いで、英霊の慰霊顕彰事業の更なる推進と英霊が身を以って示された真の日本精神の作興に邁進すべきことを誓われた。

献歌・世田谷コールエーデ合唱団

続いて御来賓の保坂展人新世田谷区長が挨拶に立ち、特攻勇士の尊い犠牲によって戦後66年、我が国の平和と繁栄があることを忘れず、平和宣言都市・世田谷区民を代表して英霊に感謝の誠を捧げると共に、平和と福祉のために全力を尽くすことを誓われた。

次いで、献吟二曲が、一誠流・石橋一歌氏の吟、逢坂龍信氏の笛で朗詠され、続いて世田谷コールエーデ合唱団（指揮大穂孝子氏）による献歌「ふるさと」「翼をください」の二曲の合唱が献奏された。朗々たる献吟、優しく美しき合唱の声に、英霊たちも御霊安らかに唱和されたものと拝察する。

献奏・トランペット　田檜雅之　サキソフォン　鈴木隆春

次いで、世田谷区民吹奏楽団によるトランペット（田檜雅之氏）とサキソフォーン（鈴木隆春氏）の献奏「海ゆかば」があり、更にトランペットの吹奏に合わせて、全員で「海ゆかば」を斉唱した。その後、若く凛々しい陸海軍衛兵隊によるラッパ献奏と鎮魂の儀礼が行われた後、名誉会長・理事長・御遺族を始め参列者一同祭壇前に進んで順次焼香を行った。

その後、式衆一同退堂して池前に進み、池中に立ち給う観世音菩薩（夢違い観音）に向かって朗々と『般若波羅蜜多心経』の声明並びに神官による祝詞の奏上があって、滞りなく年次法要の幕を閉じ、引き続き、15時30分から約1時間、各テントに参列者相寄り、和やかに直会の杯を交わして歓談した。誠に身も心も清められ、温められた一日であった。

なお、今回の年次法要で特筆すべき事項の一つを紹介させていただくと、次のとおりである。

それは、神州不滅特別攻撃隊の谷藤徹夫少尉の御遺族で、姪御さんに当たる三姉妹（谷藤少尉の妹吉田泰子様の長女吉田ひろみ様（世田谷区）、次女小原真知子様（青森県むつ市）、三女鮫島美知子様（鹿児島市））がお揃いで参列されたことである。

神州不滅特別攻撃隊のことについては、世田谷山観音寺の特攻観音堂に向かって左側、鍾楼との間に黒御影石の「神州不滅特別攻撃隊の碑」があり、その碑文に顕彰碑建立由来記が刻まれているので、御承知の方が多いと思われるが、改めて掲記すると、次のとおりである。

「第二次世界大戦も昭和二十年八月十五日祖国日本の敗戦と云う結果で週末を遂げたのであるが終戦後の八月十九日午后二時当時満州派遣第一六六七五部隊に所属した今出少尉以下十名の青年将校が　国敗れて山河なし生きてかひなき生命なら死して護国

の鬼たらむ　と又大切な兵器である飛行機をソ聯軍に引渡すのを潔しとせず谷藤少尉の如きは結婚間もない新妻を後に乗せて前日二ノ宮准尉の偵察した赤峰附近に進駐し来るソ聯戦車群に向けて大虎山飛行場を発進前記戦車群に体当り全員自爆を遂げたものでその自己犠牲の精神こそ崇高にして永遠なるものなり　此処に此の壮挙を顕彰する為記念碑を建立し英霊の御魂よ永久に安かれと祈るものなり

陸軍中尉　今田　達夫　広　島
〃　馬場伊与次　山　形
〃　岩佐　輝夫　北海道
〃　大倉　巌　北海道
〃　谷藤　徹夫　青　森
〃　北島　孝次　東　京
〃　宮川　進二　東　京
〃　日野　敏一　兵　庫
〃　波多野五男　広　島
陸軍少尉　二ノ宮　清　静　岡

昭和四十二年五月

神州不滅特別攻撃隊顕彰会」

（編注・階級は戦死後一階級特進）

これら10名の英霊の出身は今田中尉が幹候八期、馬場中尉が幹候九期、岩佐、大倉両中尉が仙台、谷藤、北島両中尉が大刀洗、宮川中尉は熊谷出身の特操一期生、日野、波多野両中尉は乗員養成所出身の操縦候補生九期であり、二ノ宮少尉は少年飛行兵出身で、第六十四戦隊生き残りの練度の高い操縦者であった。

満州派遣第一六六七五部隊とは、昭和19年9月、仙台陸軍飛行学校が南満洲に移駐し、第五練習飛行隊を編成した教育隊で、本部と第三教育隊は錦県に、第二教育隊は興城に、第一教育隊は山海関に近い綏中に配置されていた。そして、昭和20年4月以降、順次と号（特攻隊）要員となり、訓練を積んで同年6月以降逐次振武隊を編成して支那方面に展開した。神州不滅特別攻撃隊の隊員たちは、教官として少年飛行兵ら「と号要員」の教育に当たっておられた方々である。

昭和20年8月9日、ソ連軍は突如として満ソ国境を突破し、大軍をもって怒濤の如く侵攻してきた。8月15日の終戦後もソ軍の侵攻は止まず、17日には反乱を起こした満軍兵士によって機銃掃射を受け、将校や整備工たちが戦死するという事件も生じたため、部隊にあった97戦、直協全機の機銃に実弾を充填して威圧飛行を行ったりして、非常に緊張した状況にあり、かつ、ソ連軍の侵攻近しとの緊迫した情勢下に置かれていた。しかも、かなりの情報の混乱もあったようである。この特攻隊には、谷藤少尉の新妻朝子夫人が夫と共に同乗して体当たりを敢行しており、また、大倉少尉には、伊予屋旅館の親戚の女性スミ子さんが同乗していたとの証言もあり、異様な感を抱く人もあるかと思われるが、当時の満洲での異常な、厳しい状況下において、已むに已まれぬ行動であったとも取れようし、夫婦愛の一つの表れなのかもしれない。現にその周辺では、軍人の家族達が、生きて辱めを受けるよりは、と自決する事態も生じていたとのことである。

昭和42年5月、世田谷山観音寺太田賢照住職の御好意と当時の部隊長や特操一期生ら戦友達の努力によってこの

保坂展人世田谷区長

池中に立つ夢違観音像

軍旗参入・陸軍衛兵隊

ラッパ献奏・海軍衛兵隊

御遺族焼香

焼香・山本卓眞名誉会長

駒繋神社社殿

池前の法要（読経・祝詞奏上）

地に慰霊碑が建立され、当時特攻平和観音年次法要日であった5月5日に、御遺族も交えて盛大な除幕式が挙行され、航空自衛隊の音楽隊も参加して軍歌を吹奏するなどしたため、それまで遺族の方々も、自爆ということで近所にもはばかるように、正式なお葬式もしていなかった方もおられたとのことであったが、非常に喜ばれて「帰ったら立派な葬儀のやり直しをする」と仰った方もおられたとのことであり、その後正式に戦死認定がなされて靖國神社にも合祀され、特攻平和観音像内に納められている霊璽簿にも追記された。また、平成20年8月15日に全訂刊行された『特別攻撃隊全史』にも追録された。

この日、世田谷区にお住いで、毎年年次法要に参列しておられる長女吉田ひろみ様の御案内で、本州の北端青森県むつ市にお住いの次女小原真知子様と九州の南端鹿児島市にお住いの三女鮫島美知子様がお揃いで参列され、懇ろに御供養をされたので、御英霊の伯父・伯母の御霊もさぞお喜びのことと拝察する次第である。（飯田正能記）

神州不滅特別攻撃隊之碑

碑前の谷藤中尉の姪御さん三人姉妹

自衛隊は最後の砦となれるか
東日本大震災の教訓

平間洋一
(元防衛大学校教授)

「編注・本稿は、平成23年8月1日発行の靖國神社社報『やすくに』第673号に掲載されたものであるが、同神社広報課の御了承を得て、転載させていただいた。」

◇　◇　◇

今次の東日本大震災での菅内閣の対応は、70年前にコミンテルン(国際共産党本部)の指示を受けたゾルゲと尾崎秀美に操られ、日本を敗戦へと導いてしまった、操り人形の為政者の姿に類似しているように見えてならない。

コミンテルンは世界の共産主義者に労働者の祖国ソビエトを守るために、第6回コミンテルン大会で、資本主義諸国を戦わせるように仕掛け、「戦争や内乱で国家を弱体化し、内乱から革命を実現せよ」、第7回大会では「身分を隠してブルジョアの組織の中に潜入し、目的を達成せよ」などの指示を採択した。軍閥の内乱で疲弊した国民党政府内に入り、国民党を左傾化して乗っ取り、内乱から権力を握ったのが中国共産党であり、誕生したのが中華人民共和国であった。

菅直人を補佐する面々は、コミンテルン第7回大会の指令通り、「身分を隠してブルジョア組織の中に潜入して」、権力を得た者たちのイメージに重なる。さらに菅総理などが政治の師と仰ぐ大学教授は、国家を解体し社会主義国家を実現する手段として、「新しい公共」の「地域分節(分権)」を唱え、「地方自治基本法」や「男女共同参画基本法」などで国家解体を進めようとしてきた。そして菅総理を取り巻く面々が、「人権擁護機関設置法案」などにより、「民主集中」の独裁的国家に改造しようと蠢いていた。

国家を悪と規定し市民のための市民の政治などと、国家解体を推進し、地方自治体が独立国家のように振舞ってきたが、この国家解体に急ブレーキを掛けたのが今回の大震災であった。国民は国家あっての地域社会だし、地域社会がいくら頑張っても国家が動かなければ何もできないことが分かったのである。

また、今次大震災では、一部の勢力から無視され軽視されていた天皇と皇族、暴力装置の自衛隊、邪魔者視されていた米軍が日本の危機を救った。さらに、15名と犬数匹の救助隊を2週間差し向けただけで、尖閣諸島周辺に艦艇を派遣し、海上自衛隊を国防と災害派遣に兵力を二分した国、北方領土にミサイルを配備し、他国に共同投資を呼び掛け、不法な占領体制を固定化し、日本の災害救助作戦に偵察飛行を繰り返した国、小さな国ではあるが、162億円の義捐金を贈ってくれた国、今次大震災は多くの犠牲者を出したが、この犠牲者たちが死をもって「想定外」の有事が発生したときに、いずれの国が真の友人なのか、いずれの国と仲良くすべきなのかを教えてくれたのであった。

無視され蔑視されていた者達の価値

「絆を大切に」、「ひとつになろう日本」などといくら叫んでみても、主柱がなければまとまらない。天皇、皇后両陛下が静かに座って被災者の言葉に耳を傾け、一言話すだけで被災者は感激し、涙を流して復興を誓った。天皇や皇后のわずか数分の会見で、国民に希望と自信、一体感をもたらせる政治システムを持つ国は世界にはない。また、天皇はクリントン国務長官と異例の長時間の懇談を行い、15人の救助隊に福大臣が出迎えた国とのバランスを取り、日米同盟を強化し、国家の安全に寄与されたことも判ったのである。

一方、災害現場では、「何でも自衛隊。取りあえず自衛隊」と、菅内閣の失策による「二次人災」の拡大を何とか食い止めたのが自衛隊であった。しかし、その最高指揮官が「改めて法律を調べてみたら、自分が自衛隊の最高指揮官であることが判った」防衛音痴の菅直人総理、側近の出戻り副官房長官は、自衛隊をレーニンの革命用語の「暴力装置」と侮蔑した。また、直接指揮する防衛大臣は、旧軍と自衛隊の違いも判らない歴史音痴、自衛隊のクーデターを猜疑し、「旧軍のテツを踏むな」と。事あるごとに訓示している。さらに、天皇制打倒、米軍撤退、女性総理の実現を三大政策に掲げ、阪神大震災の時には、被災者に「憲法違反の自衛隊から食べ物などは貰わないで我慢しましょう」とのビラを配布した人が、災害ボランティア担当総理大臣補佐官とは、悲劇を通り越してパロディではないか。

一方、米国は大統領が「日米の友情と同盟関係は揺るぎない」との声明を発表し、米海軍は東南アジアでの共同訓練を中止して北上、16日には沖縄の第353特殊戦術航空隊が、パラ

シュートで隊員とブルドーザーを空中投下し、がれきの撤去に取り掛かり、３時間で大型輸送機Ｃ１３０を着陸させたが、翌日には大型輸送機Ｃ17が支援物資を積んでアラスカから到着した。米国はこの救援を「トモダチ作戦」と銘打ち、約１万６千人、航空機１１３機、原子力空母ロナルド・レーガンを含む艦船12隻を展開した。この突出した米国の「トモダチ作戦」が示した日本支援が、周辺の「腹黒国家」に示した抑止力の効果は大きく、中国政府の指示を受けたのであろうか、世界華人保約連盟は４月９日に、震災で混乱している時に動いては、世界から反発を受けると、尖閣諸島へ６月16日の上陸を中止した。

最後の砦の自衛隊

自衛隊員の献身的な姿は、全国から称賛が集まったが、米軍を動かしたのも身を挺した自衛隊の行動であった。しかし、全国シェア60％の東京書籍の教科書には「自衛隊の任務の拡大は、世界平和と軍縮を率先して訴えるべき日本の立場にふさわしくないという声があります」と、自衛隊の存在への疑問を教え、次いで「人間一人ひとりに着目し、その生命や人権を大切にすべきだという『人間の安全保障』という考えが出されています」と、本年３月に文部科学省の検定をパスした教科書は、市民国家のユートピア的平和主義を教えている。

軍隊の戦闘力は、兵器の性能と運用（使い方）、隊員の士気の相乗積で決まるが、愛する家族と別れて戦地に赴き、命令ならば死を覚悟して弾の中に飛び込まなければならない兵士の士気や規律は、愛国心で支えられ、国民の感謝と支持に支えられて不動の信念へと高められるのである。そのため、いかなる国も戦没者を称え、感謝と哀悼の意を捧げているが、それは兵士の祖国への忠誠心が国の安全を大きく左右するからである。

また、命を捧げる祖国は「誇りある国」でなければ愛国心は生まれない。侵略国家と言われる祖国のために、兵士が命を捧げることはできない。しかし、日本では国のために戦い命を捧げた兵士を侵略戦争の尖兵であったと、天皇陛下御親拝の環境を閉ざし、小泉首相以降宰相が参拝しないだけでなく、戦死者を貶める首相談話を「政府見解」として憚らない。村山談話に反したとして田母神俊雄航空幕僚長が職を解かれ、自衛官の精神的支柱である「誇りある国」の教育は、「罪深い国を自覚させる教育」に変えられた。さらに、防衛省内局は「村山談話に違反していないか」と、思想統制とも言うべき防衛監察を実施し、村山談話に合致した歴史を教えよと命じた。検証も経ずに軽々に「侵略国家」と断定した「村山談話」が、自衛官の精神的支柱を奪い、自衛官を骨抜きにしつつある。陛下の「お言葉」で救援活動に励む組織の最初に自衛隊を挙げ、「努力に感謝」すると労をねぎらっただけで隊員は涙し奮い立った。しかし、自衛官は一度も陛下に言上することも拝謁をすることも許されていない。今度の災害は平時であったが、３名が過労から死去された。しかし、祀られるのは市ヶ谷駐屯地内の自衛隊殉職者慰霊碑で、事前に申請しなければ遺族であっても自由に参拝はできないし、参拝するのは毎月１回の自衛隊ＯＢの有志だけである。諸外国では、国家の命令に従って銃を執り、生命を捧げた人々には、国立墓地や慰霊碑などを造り、感謝と慰霊に務めている。靖國神社は、国のために戦って亡くなられた方々に対する感謝と慰霊の神聖な社であり、国の護りの「お守り」である。「想定外」には自然災害と外国の攻撃による災害があるが、国を護ろうと戦って戦死した自衛官に栄誉が与えられ、国民挙げて感謝と慰霊を捧げなければ、「想定外」の外国の侵略に生命を賭けて国を守る人はなく、クェートの外人傭兵やフセインの親衛隊員のように、自衛隊員も一日にして霧散してしまうのではないか。

もう一つの「想定外」

政府や関係官庁や会社は、今次の災害を「想定外」と逃げたが、この機会に考えなければならないのは、「想定外」の日本有事であり、各省庁の省益追求の焼け太りではないだろうか。阪神大震災では警察庁が防災ヘリ、消防庁が梯子車、海上保安庁が消防艇、地下鉄サリン事件では、首都の警備を自衛隊に任せたのでは警察の名折れと、ＳＡＴ（テロ対策部隊）を創設した。一方、為政者や国民は「安全安心な社会」とか「生活第一」と、子供手当などの社会保障を重視し、防衛費は削減され続け、子供手当より少なく、武器は時代遅れとなり、それを動かす陸上自衛隊の隊員は、警察官の27万８７０人の半分強の15万２０００人と痩せ細ったままである。

現在の世界、特にアジアは、中国の高まるナショナリズムから19世紀の帝国主義の時代に戻ってしまった、と識者は言う。この新帝国主義の脅威に、オーストラリアやシンガポール、フィ

リピン、マレーシアなどのアセアン諸国は軍事費を1・5倍に増額し、米国との軍事的協力関係を強化しつつあるが、日本にはこのような動きは全く見られない。自衛隊が今次大震災で活躍したことから、自衛隊の災害派遣が高く評価され、期待が高まっているが、現在の憲法や集団的自衛権、官僚組織や法体系では、「想定外」の戦争に自衛隊は対応できないことを東日本大震災が教えてくれた。しかし、国家の安全保障も日米同盟の深化も、自衛隊のあるべき姿の見直しや増強などは、津波のヘトロに埋没されたままであり、国益を追う腹黒国家のパワーゲームからも外されて久しい。

8月15日の靖國神社

大東亜戦争終結から66年目を迎えた8月15日、靖國神社には朝早くから、英霊を偲ぶ御遺族、戦友を始め、大勢の参詣者が、全国から続々と訪れた。

この日も、朝から強い夏の日差しが照りつけ、一点の雲もない晴天。連日摂氏35度を超える猛暑日となった。にもかかわらず、炎天のもと参詣の人波は途絶えることがなかった。

８月15日朝の靖國神社社頭

青年部「あさなぎ」の麦茶接待所奉仕

看護師有志の救護所奉仕・左より２人目 佐々木ひろ子さん

こんな時、何よりも有り難いのは、靖國神社崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の奉仕による冷たい麦茶の無料接待である。心の籠もった麦茶は、何よりも美味しい甘露の水と言うべきか。

更にこの日は、特に高齢者にとっては厳しい暑さのため体調を崩す者も多く、それらの人々の救護には、例年、当顕彰会の会員でもある成田日赤病院の看護師佐々木ひろ子さんを始め数名の看護師さん達が救護所に詰めて奉仕しておられるが、誠に有り難く、頼もしい限りである。靖國神社の発表によると、この日の社頭参拝者数は、例年に劣らず、15万6千人を数え、団体・個人等昇殿参拝者数も4千5百人を超えたとのことであり、東日本大震災の大惨禍を被ったにも拘わらず、日本人の心は決して衰えることなく、このような国難に際してこそ、鬱勃として湧き上がり、再生復興への決意と祈りを込めて参拝に来られたものと思う。

なお、この日、菅直人総理大臣以下閣僚は、昨年に引き続き一人も参拝しなかったが、午前11時には、自民、民主その他の各党の国会議員が加盟する「みんなで靖國神社に参拝する国会議員の会」（古賀誠会長）の衆参両院議員117名（代理を含む）が揃って昇殿参拝をし、また、安倍晋三元首相、谷垣禎一自由民主党総裁、亀井静香国民新党代表、石原慎太郎東京都知事、森田健作千葉県知事等がそれぞれ昇殿参拝をし、森喜朗元首相が拝殿前で参拝をしたとのことである。

午前9時から斎行された英霊にこたえる会主催の「第36回全国戦没者慰霊大祭」には、全国から参集した約5百名の参列者が拝殿に溢れ、折柄の猛暑と熱気により吹き出す汗も拭わずに、じっと正座して真剣に祝詞や祭文に耳を傾けていた。

拓殖大学吹奏学部の伴奏により、国歌斉唱の後、修祓、献饌、祝詞奏上の神儀があり、次いで祭文奏上が行われたが、中條高徳会長は祭文の中で、この度の東日本大震災は、戦後の日本人が物質偏重で精神的価値をなおざりにし、東京裁判自虐史観の呪縛から脱却できず、尊い一命を捧げて国に殉じられた英霊を祀る靖國神社にも参拝し得ない政治姿勢や領土問題、拉致問題等をめぐる日本政府の対応の不甲斐なさに、英霊が下された「天の戒め」と国民等しく自戒の念を深くするものであ

り、天は、日本の現状を戒め、戦後最大の試練を日本国民に与えたが、日本国民は忘れていた「大和魂」を取り戻し、この試練に立ち向かい、一日も早い復興を成し遂げるものと確信しており、そのためにも総理以下全閣僚、全国会議員が靖國神社に参拝し、大震災からの速やかなる復興と「美しい国日本、世界に誇れる国日本」の再建を祈念することから始めるべきである、また、大震災に際して示された天皇陛下の御心を体し、国民一丸となって、復興に邁進することを誓うと共に、英霊の一層の御加護を祈念された。

次いで、これまでの佛所護念会教団合唱部に替わり、お馴染みの尾崎音楽工房合唱団による「ふるさと」「同期の桜」「海ゆかば」の献樂があり、その後、参列者全員昇殿参拝をして、滞りなく慰霊大祭を終えた。

引き続き10時30分から、参道の特設大テントにおいて、英霊にこたえる会と日本会議の共催による「第25回戦没者追悼中央国民集会」が開催された。

集会では、始めに国歌斉唱、靖國神社拝礼の後、この程雑音を取り除き明瞭化された昭和20年8月15日の「大東亜戦争終戦ノ詔書」の玉音放送を拝聴したが、プログラムに掲載された詔書の文字を追いつつ改めて拝承すると、「・・而モ尚交戦ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ・・」「・・今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」「朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ・・」「・・同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク擧國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ・・」とあり、かの超非常の時に当たって、実に事態を的確に把握し、危難を乗り越えて国家と国民の進むべき道を明確にお示しになられている。この「終戦ノ詔書」といい、先の東日本大震災の直後に賜った天皇陛下の「おことば」といい、我が国の危急存亡の難局に際し、歴代天皇並びに皇室が果たされてきた役割の重大さに、改めて感銘した次第である。

三好達日本会議会長挨拶

中條高徳英霊にこたえる会会長挨拶

提言者・一色正春氏

提言者・佐藤正久氏

提言者・小野田寛郎氏

炎天下、大テントの内外に溢れる約2千人の参会者を前に、中條高徳英霊にこたえる会会長及び三好達日本会議会長（元最高裁長官）の挨拶があり、各界代表として、ルパング島の勇者小野田寛郎少尉・現（財）小野田自然塾理事長、イラク派遣隊長佐藤正久1佐・現参議院議員、尖閣領海侵犯中国漁船の暴状ビデオを発信した一色正春元海上保安官がそれぞれ提言を行った。いずれも現内閣の政治姿勢、我が国の直面する情勢を憂い、これを打開すべき至誠溢れる発言であった。

中條会長は、慰霊大祭における祭文同様、総理以下閣僚全員が靖國神社に参拝し得ない政治姿勢や、領土問題、拉致問題等をめぐる日本政府の不甲斐なさを靖國の英霊に詫びるとともに、この度の大震災を日本国民に下された天の戒めと受け止め、自戒の念を深くするとともに、これにより大和魂を取り戻した日本人は、同胞相助け合ってこの試練に立ち向かい、一日も早い復興を成し遂げなければならない。

また、この大震災に対する天皇皇后両陛下の御心配りに見られる国家非常の際における天皇陛下の御存在は、我が国がこの困難を乗り切る最大の力となるものであり、我々国民は両陛下の御心を体し、一丸となって復興を成し

遂げるべく尽力することを靖國の英霊にお誓い申し上げる、と強調された。

三好会長もまた、祖国と同胞を護るために一命を捧げられた戦没者を追悼し、慰霊し、顕彰することは、宗教、宗派あるいは民族、国家を超えた人類共通の普遍的な気持ちであり、国としても、同胞としても、当然になすべきことであるにも拘わらず、現内閣の閣僚は、今年も総理をはじめ誰一人として靖國神社に参拝しない、これは国の為政者として当然なすべき道義上の義務違反である。我々は、菅総理をはじめ現閣僚に対し、怒りを込めて強く抗議し、猛省を促すものである。

一方、今回の大震災に際して賜った天皇陛下の「おことば」は、昭和天皇の「終戦ノ詔書」と共に、何時の世においても、天皇陛下は国民を想い、国民の幸せを願い、常に国民と共にあられる。古来変わることなく天皇を中心に戴いてきた我が国の国柄を改めて銘記すべきである。また、この災害の中での我が国民の行動に、日本の将来について大きな光明を見出すことができた。一旦緩急あるときは、祖国と同胞のため我が身を顧みずに力を尽くす、という信念及び行動が随所に見られたことである。それに引き換え、日本国としての矜持も誇りもかなぐり捨て、他国にへつらい、侮りを受け続けている現政府の外交姿勢、その端的な現れである尖閣諸島付近の領海内での中国漁船の暴虐事件をめぐる不当な処置、竹島あるいは北方領土をめぐる諸問題、更には深刻な国際経済問題等々、危機、難題は山積している。このような我が国の現状をもたらした元凶は、戦後の教育である。国家、公共を軽視し、自分の利益、あるいは目先の楽しみを求めることに最大の価値を置くとともに、自虐史観を植え付けてきた戦後教育にある。このような戦後教育を打破して、新教育基本法に則った正しい国家観、歴史観を育むよう努力を傾注しなければならない、と強調された。

提言者の小野田寛郎氏は、戦後の日本人は、人権、人権と言うけれども、国家なくして人権と言っても何の効果もない、国家という独立した集団に属しているからこそ、その社会の中で人権が保障されているわけであって、決して一人一人が勝手に生きているわけではない、国のために命を捧げられた大勢の方々をお祀りする靖國神社の前で、改めて国とは如何なるものか、我々を守ってくれているのは何か、如何なる根拠によるのか、そういうことをよく考えていただきたい、と訴えられた。

佐藤正久参議院議員は、この程鬱陵島視察のため韓国に行って空港で入国を拒否された事件に触れつつ、これまで、韓国は日本に対し、歴史問題を取り上げて謝れと言えばすぐ謝る、図書を渡せと言えばすぐ渡す、ところが今回は来てもらっては困ると言うのに来てしまった。初めてのことで、韓国政府は驚いて入国の目的も行動予定も何も聞かないまま入国禁止とした。空港におけるデモといい、余りにも騒ぎを大きくしたため、国際社会に日本と韓国との間に領土問題があるということがあからさまになってしまった、今回の我々の入国の目的は、単に視察だけではなく、行動を起こさなければ何も進まない、扉は叩かなければ開かない。これが一番問題であり、今後も日本は国際的にキチンとした発言をすべきである。

更にまた、今度の大震災で、自衛隊の方々には、英霊の思いを体現し、汗をかいていただいた。英霊の思いが自衛隊に受け継がれている、自分を犠牲にしてでも守るべきもののために汗をかく、力を出し切る、これが一番大事なことである、と強調された。

最後の提言者の一色正春元海上保安官は、英霊の方々が命をかけて守られた領土が他国に占領されている、何百人の方々が他国に拉致されて取り戻すことさえできないでいる、こんな日本にしたのは私を含め、今生きている人間の責任ではないか、そのような思いで靖國の英霊にお詫びをしてきた。

靖國神社に祀られている二百四十六万六千余柱の英霊の方々は、様々な形で、様々な思いで亡くなられたと思いますが、神や伝統を畏れない、現代の価値観だけで物事を判断し、その時代に生きた人にしか分からないことに思いを馳せない、そういう人は信用できない。亡くなられた方の時や思いはその時点で永遠に止まっている、「靖國で会おう、九段で待っている」と言い残して死んで逝った人の思いを、我々生きている人間がどうやって変えることができるだろうか、日本人であれば安らかにお眠りくださいと、どうして言えないのか、靖國という社号に込められた祖国を平安にする、平和な国家を建設するという願いを、我々の子々孫々に伝えていき、この靖國神社と英霊を永久に守っていくことこそ、日本人の義務だと思う、と訴えられた。

その後、正午より日本武道館からのラジオ中継で、政府式典での天皇陛下のお言葉を拝聴し、青年合唱団による英霊に捧げる唱歌合唱の後、声明文を朗読し、参加者の総意によって採択され、最後は全員で「海ゆかば」を斉唱して集会は終わった。（飯田正能記）

日本の歴史と危機管理
―日本はまあ助けられたか―

陸士61期　高橋晃太郎

「編注・3月11日、東北太平洋沖で発生したマグニチュード9・0の巨大地震と大津波（東日本大震災）、それに起因する東電福島第一原発の大事故は、2万3千余の人命を奪い、数十兆円にも上る甚大な物的損害と精神的被害をもたらし、平成の国難とも言われるが、発生直後の混乱、その後3カ月余を経過してなお、復旧・復興の目処さえつかない停滞ぶり、政府・国民の危機管理はどうなっているのか、痛烈な反省と迅速な対応が求められる時であるが、有史以来今日まで、日本人が経験した数々の国難をどう乗り越えてきたのか、先人の歩みを辿り、その知恵と志に学び、国の守りを再認識する必要がある。

本稿は、今回の東日本大震災前に書かれたものであるが、筆者は、かつて当顕彰会会報『特攻』第74号に掲載された「コミンテルンの昭和史への介入度は如何に」と題する論稿の作者でもある。長年教職にあって高校生等の教育指導に当たられた方だけに、我が国の過去の国難に際しての為政者並びに国民の対応の歴史を分かりやすく、興味深く解説されている。本稿は、埼玉陸士61期生会の会誌に寄稿されたものであるが、筆者等のご了承を得て転載させていただいた。（23年6月20日記）」

1　白村江（はくすきのえ）の敗戦

漢の武帝が朝鮮半島を制圧し、楽浪郡を置いたのは紀元前108年であった。中国では3世紀に後漢が滅んだ後、朝鮮北部に高句麗が台頭し、楽浪郡を攻略して、約400年に及んだ中国の朝鮮支配は終わる。朝鮮半島には北部に高句麗、南部に新羅、南西に百済が興り、ほぼ三国鼎立の時代となった。対する日本列島には倭と呼ばれる大和朝廷が興った。三国のうち軍事的にやや劣勢の百済は倭と協力を必要とし、366年百済の使者が初めて日本に来たり、仏教を含む中国の文物を提供していた。日本には百済観音という名仏像もある。367年には、建国間もない百済は、高句麗と戦い、我が国に援助を求めたので、大軍を派遣し、百済を助けた。そして、南端部を占領し、任那と呼び、日本府を置いて支配した。しかし、任那は562年に新羅に滅ぼされ、その後大和の勢力は朝鮮半島から追い払われていた。（先の平成22年3月、日韓両国の有識者による「日韓歴史共同研究委員会」は第2期研究報告書を公表したが、そこでは、「任那日本府」は否定されているようだ）6世紀末には隋が中国を統一し、百済と新羅は、隋に対して恭順の意を表したが、高句麗はそうしなかった。そこで隋の煬帝は百万の大軍を以て高句麗を攻めたが、頑強な抵抗に遭い、遠征は失敗する。当時、日本の聖徳太子は、有名な「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」と、対等な態度に出た。煬帝は随分腹を立てたであろうが、先の遠征失敗に懲りたためか、敢えて容認することにしたのである。

618年、唐帝国が興ると、朝鮮の三国はこぞって冊封を受けた。しかし、実質は安定せず、高句麗に百済と結んで新羅を攻めるなどあったようである。新羅の王族金春秋（後の武烈王）は大活躍し、大和にも来て、大和朝廷の敬愛を集める。彼は結局唐こそが国際関係の中心的な存在であるとの結論に達し、唐の暦を用いるなど過度の忠誠を示して固い同盟を得る。そして、660年には唐と共同出兵して百済を攻略した。滅んだ百済は残党を以て再興を試み、大和に派兵を求めて来た。そこで斉明天皇と中大兄皇子は、これに応じて663年、2万7千の大軍を朝鮮に繰り出したのが、白村江の戦いであり、完敗してしまう。それから大和朝廷は唐と新羅連合軍が襲来してくるであろうと信じ、大宰府には山城、水城を築き、瀬戸内海、大阪湾、生駒山にかけて城塞を設けるなど防備し、更に都を大津に移すなどした。

その後668年に新羅は、自らの戦略に従って唐と共に高句麗を攻め滅ぼした。ここに新羅による朝鮮統一が成就した。更に新羅は統一の恩人である唐の朝鮮における拠点を攻略した。怒った唐は、懲罰戦を思い立ち、大和に協力を求めたが、大和朝廷は2度と軽挙することなく、唐に学びつつ国内の充実に努めた。

防衛大学校長の五百旗頭真（いおきべまこと）氏は、感想として、大和は独立を守る強い抗戦意志を示しつつも、進んだ外国文明を貪るように学習し、高い文明水準を我が物にして行ったのは立派であった、と述べている。この唐文明に対する対応は、約千2百年後の19世紀に西洋文明に対しても発動され、日本を西洋列強と並び立つ初めての非西洋国に押し上げることになったのである。つまり国の独立と尊厳を守ろうとする攘夷の魂と、他方で優れた外国文明を貪り学習するという二つの資質の使い分けである。

唐（シナ）・天竺（インド）等々は殆ど西洋列強に支配されたが、この小さな島国日本だけが世界史の流れを覆した。

2　元寇

文永5年（1268年）6月、大宰府を訪れた高麗の使者は、蒙古と高麗の国書をもたらした。当時蒙古に従属していた高麗は、蒙古の対日交渉の仲介を強要されて来たのであった。蒙古の国書は、日本に通交を求めたものであり、日本の従属を要求してはいなかったが、通交の求めに応じなければ出兵の用意があるという威嚇・脅しの意を含んでいた。大宰府では急いで鎌倉幕府に国書を伝え、幕府は朝廷に参上した。朝廷では評議の末、3月になっても返書を与えないことに決定し、高麗の使者は要領を得ぬまま帰国した。この間幕府は壱岐・対馬国に厳重な警戒を命じ、同様の命令は瀬戸内沿岸の諸国にも出された。こうして蒙古の襲来に備える準備を進めた。3月5日、幕府では重要な人事異動が行われ、64才の執権北条政村は身を引き、18歳の北条時宗が執権となり、幕府を指導することになった。時宗が執権となって在職した16年間は、蒙古襲来への対応が中心であり、人は時宗を評して「我が国を元寇から救う為に生まれた救世観音」と称し、頼山陽も「相模太郎（時宗）の胆雷の如し」と、その果断を讃えている。朝廷としては最初の使者には返書を送らぬことに決定したが、その後5度も高麗の使者が訪れたため、これには兎も角返書だけは出すことに決定したようであるが、幕府は返書を与えることすら反対し、使者を追い返してしまった。こうした強硬策は、時宗一人で決めた訳ではなく、幕府指導者に思想的感化を与えた禅僧の存在が考えられている。時宗の師事した禅僧の蘭渓、正念、祖元などは、いずれも宋からの渡来者であり、元に対する強い敵愾心を持っていた。この影響が極めて大きいとされている。

文永11年（1274年）、元と高麗の連合軍が来襲したが、その集団戦法と火薬の威力に日本軍（主として九州の御家人）は苦戦に陥った。しかし、偶々襲った暴風雨の為、元軍の艦船の多くが被害を受けて敗退した。日本は誠に運が良かった。文永の役後更に防護を固めた。翌年には蒙古の使者が長門に着いたが、幕府はこれを鎌倉に下し、竜口で斬ってしまう。再度の使者も博多で斬る。将に国際慣行無視の言わば蛮行とも言えるものであろうか。

果たして弘安4年（1281年）、元軍は再度来寇、この時も暴風雨が北九州を襲い、元の艦船の殆どが覆没し、日本としては何とも有り難いことであった。それから約700年後、博多湾の海底には沈没船の残骸が多く、木製の舵の一部から艦船の大きさを推定すると、約400人乗りで、これらが4百隻、約14万の軍勢であっただろうと言われる。日本としては2度の蒙古襲来の危機を乗り越えられたのは、誠に幸運であった。しかし、この戦闘では敵の土地を獲得することもできず、恩賞として与える土地も不足し、西国の武士達の間に重い軍備負担と恩賞の不足を巡って幕府に対する不満が次第に高まり、このことが鎌倉幕府の政治権力を失墜させる元となったのであろう。両戦役における時宗の年齢は、第1回の文永の役の時が24歳、再度の弘安の役の時は31歳であった。更に次の襲来に備え、依然として警戒を怠ることはなかった。しかし、その後は現れなかった。大東亜戦争中強硬派は、蒙古の襲来は暴風雨（神風）が吹かなくとも絶対勝っていたと強弁する向きもあったが、やはり暴風雨は日本としては、素直に感謝すべきところであろう。

時宗は、弘安の役の翌年、鎌倉に円覚寺を創建、敵味方の霊を祀り慰めることにした。そして、僅か34歳の若さでこの世を去ってしまったのである。人に備わった寿命とはいえ、時宗としては、元寇の対応に精魂を傾けたのであろう。後の日露戦争での満洲軍総参謀長児玉源太郎大将、また、大東亜戦争中の服部卓四郎参謀なども早世してしまった。恐らくこれらの人達も戦いに精魂を傾け切ったのではなかろうかと思う。

3　ペリーの来航

1852年、ペリーは東インド艦隊司令官となり、日本との通商開始の命を受けて、11月に軍艦4隻を率いて発進し、途中沖縄、小笠原を経て、翌年（嘉永6年）6月、浦賀に入港した。久里浜で、大統領フィルモアの国書を伝達し、開国を要求した。

当時日本に関する情報を提供したのは、ドイツ人医師フォン・シーボルトであるという。日本通という人は少ないので、シーボルトは日本へ行きたかったのであろう。ペリーやロシア帝国のプチャーチンに積極的に働き掛けて、自分を顧問にするよう売り込んだようである。ペリーもプチャーチンもその情報を大変珍重してよく読み、よく吸収した。ところで、プチャーチンは、大変行儀の良い紳士であり、シーボルトの情報をそのまま鵜呑みにし、

日本はこういう国であるから日本に対してはこういう心掛けが必要で、こういうステップを踏んでこういうふうにやれ、通訳はどういう人がよいとか、港に入るときはこうすることがよいとか、先ず長崎へ行き、長崎の奉行を通じて交渉しなければ、日本は言うことを聞かないと、プチャーチンは日本の制度、習慣を教えられたが、シーボルトの言うとおりの手順を踏んで長崎にやって来たものの、すっかり失敗してしまった。

一方、ペリーはシーボルトの情報を十分承知し、知識としては内に秘めておいて、それをどう実践するかは、自ら現地へ行って考えるという、個性の強い人のようで、大変な決意の末、長崎へは行かずにいきなり浦賀にやって来た。三浦半島の先に観音崎があるが、ペリーの海図にはこれをルビコン岬と書いてあったという。つまり、ここを渡るには、命がけの重大な決意を以て臨んだようである。

開国の国書に対し、日本からは翌年まで猶予を求められ、帰途小笠原を占領する。翌年は軍艦7隻を率いて江戸湾に来航し、条約締結を要求、遂に神奈川で和親条約、下田で追加条約を調印した。これらは勅許を得ぬまま行われ、安政の仮条約とも呼ばれた。神奈川での和親条約で、日本が鎖国から開国への第一歩を踏み出した。全12条からなる内容は、下田、函館の開港、薪水、食料、石炭、欠乏品の供給、アメリカ漂流民の救済扶助、片務的な最恵国待遇条約、鎮守の駐在などであるが、かなりの条文の不備を免れなかった。

その後1858年（安政5年）に、日本（江戸幕府）とアメリカとの間に締結された日米修好通商条約は、14箇条からなり、別に貿易条項7条からなる。両国の首都には外交代表を、開港場には領事を駐在させ、神奈川、長崎、新潟、兵庫を開港、江戸、大阪の開市、両国人民の直接自由な貿易と内外貨幣の同程度量による通用を定め、遊歩区域、アメリカ人の信教の自由などを規定していた。

日本はその後、半世紀にわたって不平等条約修正の努力を続けることになった。引き続いて安政の五箇国条約（アメリカを含む、対オランダ、ロシア、イギリス、フランスの五箇国）が、アメリカと同じように結ばれた。

その後、長州藩による外国船砲撃事件の報復として、イギリス、アメリカ、フランス、オランダの四国連合艦隊に攻撃され下関砲台は占領された。また、薩摩藩の生麦事件報復として、イギリス艦隊による鹿児島攻撃で列国の実力を実感させられた。これらにより特に長州藩、薩摩藩の心ある士族は討幕の思想を固め、王政復古、開港和親への政策に転換して行くことになり、明治維新へと進むことになった。

なお、ペリーは日本に対し、軍艦を率いながらも砲撃はせぬようにとアメリカ議会から言われていたという。アメリカは西欧の植民地政策には必ずしも賛意を表してはいなかったようだ。今思うに、明治の頃の人材は、真に日本のことを考えていたが、当今の政治家は目先の、特に自分への利益のみを考える者が多いような感じで残念でならない。

4　日清戦争の勝利（明治27～28年）

日本は明治維新以来朝鮮進出の機会をねらった。明治6年の征韓論、9年の日韓修好条規、15・17年の朝鮮事変など。しかし、18年の天津条約以降、政治的にも経済的にも朝鮮から後退し、清国の進出と朝鮮属邦視を黙認せざるを得なかった。日本は日清戦争を予想して軍政改革、軍備拡張を進め、軍需産業を中心に資本主義育成を図った。

明治27年、朝鮮に東学党の乱が起きると、政府はこれを朝鮮進出の好機としてとらえ、清国が反乱鎮圧のため朝鮮に出兵したのに対抗して、日本もまた居留民保護の名の下に兵を送り、両国が朝鮮の内政改革の主導権をめぐって対立し、戦争の危機が迫った。日本にはロシア、イギリスなど列国の干渉を恐れて開戦をためらう空気もあったが、7月16日、日英通商航海条約の調印をもって開戦に対するイギリスの好意と判断し、ようやく開戦の決意を固める。

明治27年7月25日、豊島沖海戦をもって戦闘の火蓋が切られ、清国艦隊を撃滅、8月1日、両国は正式に宣戦を布告した。9月15～16日、陸軍は平壌付近で清国軍の主力を撃破、海軍は18日、黄海の海戦で大勝し、制海権を握る。次いで我が第1軍は10月下旬、鴨緑江を渡って南満洲に進み、第2軍は遼東半島を制圧、旅順、大連を占領し、翌年威海衛を攻略して北洋艦隊を全滅させた。第2軍は北京、天津を狙うに及び、列国は清国の倒壊を恐れ、相次いで講和を勧告、明治28年4月17日、下関条約が締結された。

日本全権　伊藤博文、陸奥宗光
清国全権　李鴻章、李経芳

条約本文11条

1　清国は朝鮮の独立を認める。
2　遼東半島、台湾、澎湖島を日本

に譲渡する。

3　賠償金2億両を支払う。

4　日本に有利な通商航海条約を新たに締結すること、等々

翌年7月、日清修交条約が締結されたが、間もなく遼東半島の領有につきロシア、フランス、ドイツの三国干渉が起こり、日本はこれを返還して代償金300万両を受け取った。

三国干渉は、日本では「臥薪嘗胆」の言葉が起こり、国中奮起の風潮が醸し出された。やがて日露戦争の遠因の一つとなった。

日清戦争の結果、日本はほぼ欧米諸国と対等の独立国家となった。

5　日露戦争

日本は日清戦争後の三国干渉以来、ロシアとの戦争に備えて「臥薪嘗胆」をモットーに軍事産業の開発と軍備の拡張に努めた。

ロシアは日本を対象とした露清条約を結び、東清鉄道の敷設権を獲得、大連、旅順を租借し、特に明治33年の北清事変後は、満洲を軍事占領して満洲支配の意図を露骨に現し、更に朝鮮への勢力拡大を狙っていた。東アジアをめぐる列国の帝国主義的対立が激化、日本はロシアと妥協するか、イギリスと提携するかについて議論されたが、結局はイギリスを選んで明治35年、日英同盟を結び、ロシアの南下を阻止する決意を固めた。

明治36年には、日露間に交渉が行われ、日本はロシアの満洲支配を認める代わりに、日本の朝鮮支配を認めるよう提案したが纏まらず、明治37年2月10日、遂に宣戦を布告した。日本は韓国と攻守同盟及び日韓議定書を結び、陸軍は仁川に上陸し、京城に入った。海軍は仁川沖でロシア艦隊を撃破し、旅順港を封鎖した。8月には黄海と蔚山沖で制海権を握る。陸軍は満洲軍総司令部を設置し、9月に遼陽、10月に沙河の会戦で勝利を収め、12月には多大の犠牲を払って漸く二百三高地を占領、翌38年3月、奉天会戦でロシア軍を打ち破った。5月には、かの有名な日本海海戦でバルチック艦隊を撃滅した。バルチック艦隊38隻中、20隻が撃沈され、捕獲された艦も多く、逃走したのは僅かに2隻。これに対し日本艦隊は水雷艇3隻を失ったのみの圧倒的勝利を収めた。東郷司令官の適切な指揮、秋山真之参謀の画期的な戦術、日本の新火薬の威力、そしてイギリスとの同盟の結果、バルチック艦隊はスエズ運河を通れず、喜望峰回りでほぼ3カ月、途中寄港もできず、恐らく艦底には貝殻の付着多数、そして乗組員はすっかり士気停滞。イギリスとの同盟は何とも有り難いことであった。

我が軍は更に、7月には樺太を占領した。しかし、日本の戦力消耗は著しく、これ以上の戦争継続は困難となった。ロシアは、本国から精鋭部隊を送り込み、戦局は逆転の形勢すら憂慮された。しかし、ロシア国内では革命運動が激化し、兵士や国民の戦意喪失が明らかとなり、アメリカ大統領ルーズベルトの勧告を容れて、9月5日ポーツマス条約が締結された。日本全権は小村寿太郎、ロシア全権はウィッテである。

この結果、日本は朝鮮に対する支配権を確立し、南満洲への進出が決定的となる。一方、国内では社会主義者、キリスト教徒等によって反戦運動が進められ、また講和条約への不満から日比谷焼き打ち事件などが起き、不穏な社会情勢となった。

一方、日露戦争における日本の勝利が海外に与えた影響は大きかった。アジアの小国日本が大国ロシアの南下を食い止め、独立を確保したことは、中国の孫文やインドのネールを始めとしてアジア諸国民に自信を与えた。やがてトルコ、エジプト、ポーランド、フィンランドでも独立運動が巻き起こる。一方、ロシアのスターリンはこの敗戦を、恨み心頭に達する思いでいたと見受けられる。

6　大東亜戦争の敗戦

昭和16年12月8日（1941年）、日本が米英蘭に向けて宣戦を布告したのは、止むを得ないことであったが、昭和20年の戦争末期の処理については、誠に遺憾であった。

ポツダム宣言が出されて、「これを無視する」との返答の結果、広島、長崎の原子爆弾投下の口実に利用されてしまった。更に、和平の仲介をソ連に依頼する方向に進めたことは、何とも残念な策であった。鈴木貫太郎首相の「スターリンは西郷さんに似ている。悪いようにはすまい」と言った判断を時の閣僚が認め、近衛元老が昭和天皇に召されてソ連への仲介を依頼され、近衛は直接米英に申し入れることを上奏することも考えていたが、これ以上御宸禁を悩まし奉るのは恐れ多く、ソ連への申し入れを行ったところ、その回答が、日本に対する宣戦布告という実力行使であったことなど、何とも不幸なことであった。

8月9日早朝、満洲方面への無通告奇襲侵攻開始以後、満洲は全くの地獄と化した。8月11日辺りから南樺太へ侵攻、8月18日千島列島北端の占守島

への攻撃、これには第91師団の断固とした反撃、相手に多大な損害を与え、北海道への侵攻を阻止したことは、極めて有意義な対応であった。８月４日夜、ポツダム宣言の受諾通告を受けたマッカーサーは、８月15日に太平洋の全米軍に戦闘行動の停止を命じたが、ソ連は日本の申し入れは単なる一般宣言に過ぎず、日本軍が抵抗を続けているとの勝手な理由を付けて次々と攻撃を続行してきた。択促島には８月28日、色丹島には９月１日、歯舞群島には９月４日と、アメリカ軍のいないのを見定めながら、限りなく侵攻してくる。スターリンは、北海道の北半分、留萌と釧路を結ぶ線以北を占領するつもりでいた。

マニラのマッカーサー司令部に派遣された河辺虎四郎参謀次長が到着した19日夜に示された正式降伏文書の調印は、８月28日であったが、その後の台風、更に受入準備のための日本側の希望で延期され、９月２日に調印が行われることになった。日本の進歩的文化人と称される何人かは、ソ連の侵攻は９月２日までは当然であったのだとソ連の肩を持っている。何とも不思議な現象があるものだ。兎も角、結果において、北方四島は略奪されてしまったが、北海道は守り抜けたのは、極めて幸いなことであった。満洲にあった日本将兵60万名をシベリアに抑留したのは、北海道の北半分が取れなかったスターリンの報復であろうと、瀬島龍三氏は述べている。既にあれから60余年が経過しているが、北方四島の日本への返還の気持ちは、ロシアには毛頭ない。鳩山元首相は、祖父の業績に事寄せて、北方四島の日本への返還を実現させるつもりのようだが、全く不可能であろう。

戦後アメリカの日本占領の基本原理は、３R、５D、３S（注３）と言われ、日本を全く骨抜きにするものであった。教育勅語等も廃止され、次第にその成果等も現れてきている。目前の願望の達成を第一とし、権利の主張に明け暮れ、忍耐、自制、差恥心、公共心、敬愛等の言葉は次第に世相から消え、自分の思うようにならないと向こうが悪いと相手のせいにするような姿になってしまった。敗戦の姿として恐らく昭和天皇の苦悩は計り知れぬものであったろうと想像される。皇祖皇宗の遺訓をすべて台なしにしてしまった。後年アメリカは、イラクに対してもうまくいくと思っていたようだが、そうはいかなかった。

ただ、昭和25年（１９５０年）に始まった朝鮮戦争は、日本としては天佑とも言うべきものであった（そのようなことを言っては不謹慎の誹りを免れぬものではあるが）。マッカーサーも総司令官として共産主義の実態をよく把握でき、日本をこれほど徹底的に叩いてしまったのは、アメリカ百年の大失敗であったと、後日上院で述べたという。

（注）アメリカの日本占領政策

基本政策３R

Revenge（復讐）

Reform　（改組）

Revive　（復活）

重点的施策５D

Disarmament　（武装解除）

Demilitarization

（軍国主義の排除）

Disindustrialization

（工業生産力の破壊）

Decentralization

（中心勢力の破壊）

（内務省、財閥の解体、

警察を国と地方に分解）

Democratization　（民主化）

補助政策３S

Sex

Screen

Sport

安岡正篤博士の見解「うまい政策で日本人を全く骨抜きにした。日本人はむしろ迎合した。今日の日本人の堕落、頽廃、意気地の無さは、昨日今日に始まったことではない・・・」

7　願望

日本列島は、斜め南北約３千キロにわたる島々からなり、島の数は６８４７と言われている。陸士校歌の第一節にあるように、

太平洋の波の上

昇る朝日に照り映えて

天そそり立つ富士の峰の

永久に揺るがぬ大八洲

であって欲しいと切に願うものである。

（参考文献）

人物探訪日本の歴史（暁教育図書）

國土を護った最後の戦い

（北千島慰霊会・長島厚会長）

千島・北方領土はいかにして奪われたか

（中山隆志『偕行』21年11月号）

米国の日本占領政策

（中山隆志『偕行』21年７月号、

平成22年６月号）

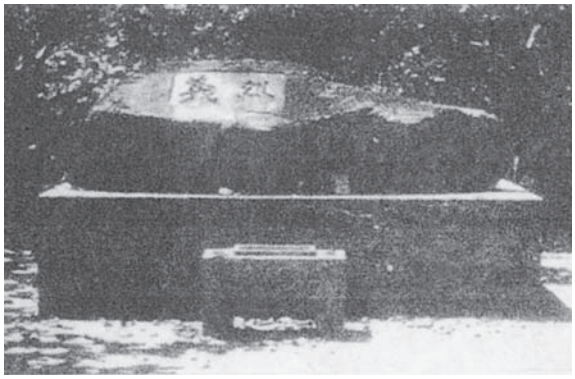
義烈空挺隊碑前祭

田中　賢一

この日が多くの人の協力によって建立されたことは、本会報『特攻』第51号（平成14年5月発行）「義烈の碑建碑の由来」と題し詳しく掲載してあるので重ねては述べないが、空挺同志会沖縄支部が毎年行う碑前祭に、私は3年前までは必ず出席していた。最後は車椅子で、娘の扶助で出席したが、爾来欠席せざるを得なくなった。

出席しないのに今年の碑前祭の記事が書けるのは、現地の主務者と習志野の空挺同志会から参加した者から詳しい報告を受けたからである。

主催者空挺同志会沖縄支部は、習志野の空挺団から沖縄の自衛隊に転属となった現職の自衛官とその退職者で構成されており、総勢15人ほどの組織である。碑前祭は毎年義烈が突入した5月24日前後に行っていたが、今年は予定した日が天候不良のため延期し、8月20日に行われた。支部員以外の参加者は、習志野から空挺教育隊長以下4名のほか近畿支部と熊本支部から代表者が参加した。地元からは沖縄隊友会（自衛隊退職者の会）及び翼友会（陸海軍航空関係者の会）からそれぞれ数名が参加した。今年の碑前祭で特筆すべきは、山城准尉の御遺族から供花があったことである。山城准尉は沖縄出身であるが、当時の記録では山城夫人の住所は宮崎県川南村となっており、戦後郷里に帰った者と思い、支部員の浜田種夫さんが手段を尽くして探し出した。その結果、山城夫人は既に亡くなり、遺児盛山栄子さんが東京都武蔵野市にお住いとのことを突き止めた。お会いして写真まで撮って送ってくれた。浜田さんは現職自衛官の医師で、慰霊については情熱を燃やしている。



式は摩文仁台上にある碑の前で行われるので、この碑のことは建碑の由来で述べたことだが、重ねて述べれば、摩文仁台上には2本の道路に沿って各県の碑が並んでいるが、その道路の合流点にこの碑がある。慰霊碑や記念碑は通常縦長であるが、この碑は義烈が発進した熊本の健軍飛行場の西にある金峯山から掘り出した大きな横長の石をドカッと据えてある。その石に奥山隊長の遺書にある「義烈」の文字を拡大して彫ってある。

慰霊祭は、例年どおり神式で行われた。桃原支部長は祭文で義烈の精神を日本人は失ってはならぬと強調した。

「義烈空挺隊玉砕之地」の木碑前にて

なお前日には、義烈空挺隊が強行着陸に成功し、2昼夜敵飛行場を完全に制圧し、航空特攻に寄与したという読谷飛行場跡に行った。そこには古びた掩体の前に「義烈空挺隊玉砕之地」という木柱が建っている。

私は碑前祭に参加出来ないので次の歌と碑の写真を掲載した私製葉書2通を作り参加者に配布してもらった。

○「義烈」の碑の前で

魂魄寄り添う摩文仁の丘
鎮まるか義烈の士
思い出ず百余のをのこ
奥山隊長の指さす所
など遅れをとるべきや

戦勢日に非なれど
乃公いでずんばの意気
挺身殉国の耿き心
我が後に続く者あらむ
散るべきときぞ美しく

梓弓　引きかへさざる
ますらをのこころ
今日このために
鍛えしわざ　練りしきも
笑顔で発ちし健軍の基地

風吹けど雨降れど
厳として立つ義烈の碑
訪う人に　語る石ぶみ
人しるや　いなや
我が国にかかる人ありしを

○読谷飛行場跡に立ちて

この辺境に　散りしをのこら
狂乱を　既倒に廻らさんの心
燃えさかる　梟敵の　とりで
路傍の小石よ　汝は　見しか
かつての叫喚　阿修羅の怒号
語り聞かせよ　いくさ神の姿
泰平の美酒に酔う　うつし世
知る人ぞ知る　丹きまごころ
あとに続けと　残せしことば
今ここに　つどいしともがら
世につげむ　失いしやまと心
取り戻さずんば　み国危うしと

香取基地慰霊祭に参加して

理事　廣嶋　文武

平成23年10月13日（木）、千葉県旭市「東総文化会館」において「旭市戦没者追悼式」が斎行され、次いで、同日、近くの旧香取海軍航空基地跡の慰霊碑前において「香取基地戦没者慰霊祭」が斎行され、その双方に参列いたしましたので報告いたします。

「旭市戦没者追悼式」においては、旧香取海軍航空基地で日夜猛訓練に励み、第二御楯特別攻撃隊（彗星12機、天山8機、零戦5機各隊）として昭和20年2月21日及び3月1日、硫黄島周辺海域の米艦船攻撃を敢行し、全員未帰還となった戦没者を始め、旭市から出征した戦没者954名及び数回の爆撃により犠牲となった市民の方々を合わせて1917名の追悼式が行われました。

（**編注**・デニス・ウォーナー著『ドキュメント神風・上』妹尾作太男訳によれば、昭和20年2月21日、硫黄島攻撃中の米空母最大のサラトガと護衛空母ビスマークシーに対し、曇天の夕刻四方から2回にわたり、日本海軍特攻「第2御楯隊」を、村川弘大尉（海兵70期）が指揮し、彗星12機、天山8機が奇襲攻撃、サラトガは飛行機の着艦不能、戦死者123名、負傷者196名、3カ月間戦列を退き、ビスマークシーは乗員218名と共に沈没の大打撃を受けた、と記されている。）

この日の追悼式場の祭壇は、かの終戦記念日の武道館での政府主催追悼式典にも劣らぬ沢山の菊花で飾られ、旭市市長、千葉県知事（代理）、匝瑳市市長、県・市議会議員、各界名士の追悼の言葉に始まり、続いて遺族会役員、香取基地慰霊会の私達が、壇上で献花をし、旭市海交会のラッパ隊による思い出のラッパ演奏などがあって、約2時間、厳粛荘重な式典は無事終了しました。

引き続き私共は、香取市の明智忠直市長らと共に、直ちに旧香取基地に向かい、慰霊塔の前で、旧海軍256空の生存者である内田さんや久保山さん達によって斎行される「香取基地戦没者慰霊祭」に参列し、軍艦旗の下、一同深い祈りを捧げました。この慰霊塔は、遥かに太平洋を望むかつての滑走路の西端にあって、35年前の昭和51年に建立され、「慰霊」という碑の刻銘は、源田實氏の揮毫によるもので、近くには、飛行機の掩体壕も現存しています。往時を偲びつつ、重ねて特攻勇士達の御霊安かれと、深く低頭して祈りを捧げました。

香取基地慰霊塔前にて

旭市戦没者追悼式祭壇

高野山「空」の碑と今年の慰霊祭

全日本空挺同志会
会長　山本　勝

◆挺進部隊による特攻

旧挺進部隊は、インドネシア、スマトラ島南部パレンバン、フィリピンのレイテ・ルソン島及び沖縄北・中飛行場等に対して運用されました。

空挺落下傘部隊の運用は、敵中深く投入されることが多いことから、また、航空機や落下傘の性能からその戦闘継続能力は限定されており、多くの場合、地上部隊との早期提携を前提としています。したがって、運用そのものが特攻作戦の性格を持ち、さらに地上部隊との提携を前提としない、或いは提携が困難な状況では正に「特攻」と言えましょう。

昭和19年12月、地上提携部隊第16師団が作戦決行日の変更を承知せず、提携を期待できない状況でレイテ島ブラウエンや地上部隊の目標になっていないドラッグ及びタクロバン飛行場に降下した「高千穂降下部隊」及び米軍占領下の沖縄北・中飛行場に強行着陸攻撃をした「義烈空挺隊」の特攻挺進部隊を始め1万2千余の方が祖国の礎として殉じられました。

◆高野山に建墓

挺進第三聯隊付の中村軍医を中心とする生き残りの空挺隊員が、総力を挙げて建立した「空挺落下傘部隊将兵の墓」は、世界遺産で、幽玄の自然に囲まれた霊地、高野山奥の院の一の橋を渡ってすぐ右の、境内で一等地とも言うべき場所にあり、鞍馬の清流に晒された鞍馬石の主碑「空」を中心に、副碑の石は仙台、背後の石は四国徳島、及び両側の石は和歌山県海南市の海岸で採取されたもので、白砂は京都の白河のものだそうです。

主碑の刻字「空」は、弘法大師空海の直筆とされる灌頂記の一字であり、空海の空、空挺部隊の空、そして己を空しくして国に殉じた空挺部隊将兵の愛した字でもあります。また、副碑には「祖国日本の弥栄を願い後に続く者を信じ空挺落下傘部隊将兵の霊は此処に静かに眠る」と記されています。

主碑、副碑ともに静かな墓という気持ちを表すため、土台を置かずに地面に植立されています。

昭和31年9月23日、開眼式が行われ分霊が宮崎県川南護国神社から遷座されました。

◆空挺戦友会

大阪に本部を置く空挺戦友会が毎年慰霊祭を行ってきましたが、主な方が逝去され、実施が困難になったため、昭和40年から碑の管理と慰霊祭を全日本空挺同志会が行うようになったと聞いています。

空挺同志会創設の目的は、戦前の空挺精神の伝統の継承にあります。この墓碑に祀ってある空挺戦死者の精神を受け継ぐことを会員誰もが思っております。そこで、その年に亡くなった会員の生前の希望或いは遺族の申し出によって遺骨を合祀することになりました。

◆全日本空挺同志会

全日本空挺同志会（以下「同志会」という。）は、昭和36年4月に創立された組織で、その会員は旧挺進部隊出身者（旧挺）及び陸上自衛隊空挺基本降下課程修了者で退官した者（元挺）並びに第一空挺団所属隊員始め基本降下課程修了現役自衛官の賛助会員から主として全日本空挺同志会ています。即ち同志会は「挺身赴難」の伝統精神を脈絡として継承する「落下傘の絆」に結ばれた旧挺進部隊将兵から現役自衛官を含む組織です。

◆今年の慰霊祭

今年の第56高野山慰霊祭は9月11日、天佑と言うべきか、台風12号と15号の狭間の良い天候に恵まれ、強い夏の日差しが薄くたなびく白雲に和らげられる中、数日来の雨により木々の緑が一層映える菩提寺不動院門前に整列した参列者約２３０名の慰霊行進で開始されました。９時10分、陸自第３師団音楽隊の行進演奏に引き続き、今年合祀される９柱の御遺族を先頭に整斉と墓碑に向け歩を進めますと、多くの方が一の橋への４００メートル程の沿道に出て激励と弔問に並び見守っていました。

慰霊祭は東日本大震災及び台風12号の豪雨災害犠牲者への黙祷後、高橋理事長の慰霊の辞に続き、献灯、国歌を斉唱し、国旗が掲揚された後、ラッパ吹奏「国の鎮め」が静寂な霊場に流れ、参列者は英霊に対し黙祷を捧げました。導師山階清隆不動院住職の入場後、読経の中、新合祀の９柱の遺骨が同志の手により安置されました。山本会長による祭文奏上、山之上空挺団長の追悼の辞、元挺安積和也氏の献詠、納骨、焼香と祭事は厳粛、整斉と進み、君塚陸幕長等の電報が披露された後、御遺族を代表して挺進第３聯隊の故中園健一氏の長男、中園靖彦氏が謝辞を述べ、最後に「空の神兵」を全員で斉唱し、国旗降下をもって慰霊祭は滞りなく終了いたしました。

なお、今年の慰霊祭の参列者は、旧挺御遺族15名、元挺等御遺族27名、来賓10名、元挺約１００名、現役自衛官約60名、空挺団協力会15名、計約２３０名でした。

英霊に敬意を表し、「挺身赴難」の伝統精神を継承する空挺隊員、第１空挺団が存在する限り、慰霊祭は永遠に継承するものと確信いたします。

私の戦争体験記

元陸軍戦闘機パイロット
会員　谷口　正範

◆はじめに

今、戦争体験記を書こうとする時、若者たちの多くは「戦争の話はもう古い」とか、「時代はもう変わったんだよ」と、聞こうともしません。果たしてこのままでいいのでしょうか。

太平洋戦争が終わって60余年か経ちましたが、地球のどこかで戦争が起きたり、また、起ころうとしています。愛する日本の国が二度と戦争に巻き込まれることのないことを祈りながら、私の青春時代を振り返ってみました。

太平洋戦争時の中国で、戦闘機のパイロットとして米空軍との空中戦を経験した私は、１９４１年（昭和16年）４月、満洲事変・支那事変と続く時代背景の中で15歳を迎え、「神州男子の行くところ、一路航空決戦へ」の宣伝ポスターに胸を躍らせながら、東京・立川市郊外にあった「東京陸軍航空学校」に第7期生として入校しました。

◆太平洋戦争開戦

１９４１年（昭和16年）12月８日、まだ航空兵としての基礎訓練中だった私たちは、太平洋戦争が始まったことを中隊長の訓示で知り、「よーし、一日も早く戦力を身につけ、頑張るぞ」と、踏ん張った時の高揚感を今でも忘れません。

翌年の４月、熊谷陸軍飛行学校ではパイロットとしての基礎教育並びに赤トンボの操縦教育を受けた後、我々戦闘機のパイロットは、１９４３年（昭和18年）10月に、中国の北京、天津において、実用戦闘機（九七式戦闘機、一式戦闘機（隼））の戦闘技術を２年にわたり習得しました。

その後、中国・青島の城陽飛行場において、後輩の操縦教育助教を命ぜられ、１９４４年（昭和19年）９月、揚子江上流の九江において、防空戦闘隊を結成し、防空任務に就きました。間もなく漢江を基地としていた戦闘隊の名門飛行第二五戦隊に転属、任務に就きました。それから終戦まで、四式戦闘機（疾風）を操縦し、中国、朝鮮の各地に転戦しました。

◆漢口飛行場・南京大校飛行場

漢口では１９４４年（昭和19年）12月18日、米軍のＢ29戦爆連合による大空襲に遭遇しました。私は戦隊長の僚機として、四式戦闘機を操縦して出撃しましたが、空中戦の途中で滑油タンクに被弾し、風防ガラスが油の飛沫で全然見えなくなり、編隊を離脱、漢口飛行場に不時着しました。

この日の戦闘でＹ軍曹が被弾墜落しましたが、空中戦が終わり、墜落現場に行ってみたところ、飛行機のエンジン部分が土にめり込み、操縦席の背当て鋼板と計器盤の間に飛行服の毛皮がわずかに残っていただけで、跡形もないほど悲惨でした。この空襲で、漢口基地の飛行第二五戦隊は壊滅状態となり、部隊の被害も大きく、26機の内、完全な飛行機は２機しか残りませんでした。

私たち６名が代替機を受領するため内地の所沢へ派遣されましたが、受け取った飛行機は、女子挺身隊が整備したもので、機関砲の照準も合わず、無線機も使えない代物でした。取り敢えず１月13日に飛び立ちましたが、伊勢神宮の上空辺りで、計器盤から座席にかけて振動が出始め、福岡の雁の巣飛行場に着陸した時は、４枚のプロペラの内１枚は私の手で動くくらいガタガタでした。

１９４４年（昭和19年）８～９月を境に、中国での制空権は米軍に握られていったのではないかと思います。その後の戦況は悪化し、部隊は１９４５年（昭和20年）２月、南京の大校飛行場に後退しました。

３月13日の明け方、私は自分の歯が全部欠けた夢を見ました。母親から「歯の欠ける夢は良くない」と言われていたので、その日は仮病を使い宿舎にいましたら、空襲警報が鳴り響き、我が軍との空中戦になり、大校飛行場を一緒に使用中の第八五戦隊のＨ少尉が戦死しました。罪悪感を覚えながらも「お袋からの警告だったのかな」とホッとしました。

◆全員が「特攻隊」を志願

南京・大校飛行場を基地としていた１９４５年（昭和20年）３月下旬、戦隊長から「特攻隊を組織するので、希望者は一歩前に」という言葉に、全員が一歩前に出ました。その中から私を含む６名が選任され、「神州留魂隊」と命名、上海の飛行場で訓練することになりました。攻撃方法は専ら海面すれすれに飛行し、敵軍艦の側面に突入する戦法でした。２週間後に後輩の特攻隊「梓弓」が配属されたので、「直ちに部隊に復帰せよ」との命令で南京に帰りました。

特攻としての出撃はせずに済んだ私も、「特攻」を決行した時がありました。終戦近くの６月か７月頃、朝鮮の群山飛行場でのことでした。空襲警報を受

け、迎撃の当番だった私は、離陸直後高度10メートル位で海岸線の防風林の方を見ましたら、敵機のＰＢ４Ｙ１機が、高度50メートルで飛行場に向かって来るのが見えました。上方からの攻撃は海面にぶつかるので、前下方攻撃で下から突き上げるしか方法はなかったので、そのまま超低空で海面すれすれにエンジンを全開し、敵機を照準眼線に入れ、同時に機関砲４門を発射、体当たりを決行しました。次の瞬間、グラグラと敵機の後流で気が付きました。体当たりは失敗でした。体当たりの瞬間、眼を瞑ってしまったのでした。その瞬間はただ「無」でした。気が付いた時、飛行機は滑りながら上昇していました。

◆中国人の「処刑」に遭遇

私が第29錬成飛行隊で助教をしていた時、１９４４年（昭和19年）６月、満洲の奉天から「二式高等練習機」を操縦して、中国・青島の城陽飛行場に空輸していた時、万里の長城の起点、山海関を過ぎて間もなく「ブルンブルン」とエンジンが空転し始め、不時着を余儀なくされました。治安が保たれている線路のすぐ脇に着陸しようと決心しましたが、目測を誤り反対方向の畠に着陸してしまい、50メートルほどの周りを中国人に取り巻かれたので、機外に出て拳銃を取り出し、一発でも撃ってきたら燃料タンクを撃ち抜きガソリンに火を付けて爆破しようとした時、半袖を着てメガネをかけた青年がやって来て、「兵隊さん、どうしました」と、たどたどしい日本語で声を掛けられた時は「助かった」と思いました。青年が来るまでの間、「俺がここで死ぬのを誰も見てくれないんだ」という切ない思いで一杯だったのを今でも忘れません。「人が死ぬ時には周囲の人が見守ってやらないといけないと思います。

不時着した飛行機は、馬４頭で１時間半掛かって駅の横まで運びました。その夜は憲兵隊の宿舎に泊まりましたが、夕方そこで中国人の「二重スパイ」（日本軍の情報を敵に流し、敵の情報を日本軍に流す）の処刑に遭遇しました。松の木が生えている墓地の木の横に穴が二つ掘られていました。一人は穴を後ろにして縛られたまま、拳銃で眉間を撃たれ、「アアッ」という悲鳴と共に穴に落ち、もう一人は「私にやってみないか」と言われましたが、「できない」と断ると、新兵が銃剣で胸を突き、穴の中に倒れ込み、血を吹き出しながら「ハァハァハァ」と大きな息で苦しむのを、新兵から銃剣を取り上げた古参兵が穴の上に跨がって更に突き刺しました。

不時着した飛行機は北京からの整備兵の到着を待って点火栓を交換の上で畠の中から離陸し、山海関まで運びました。

◆同期生の約半数が戦死

終戦の詔勅は、朝鮮の水原飛行場で聞きました。「ガァガァ」という雑音でほとんど内容は分かりませんでしたが、戦隊長から戦争は負けたと聞き、全身から力からが抜けて行くようで、勝っていると思っていた戦争に負けたとはとても信じられませんでした。

戦後、私は次の無念さを一生忘れません。前述のとおり私も、一時特攻隊の一員となった時がありました。終戦の日を境に、特攻隊の人達に対して周囲の見方が変わってしまったということでした。これはすごい裏切りだという思いが一杯でした。終戦の時、私は19歳でしたが、この無念さは決して忘れないと今でも強く思っています。

それは戦禍から命を拾って来た若者達を「特攻くずれ」と罵倒した政治家や学者やマスコミ、それに煽動された民衆への恨み、裏切りは今でも忘れません。でも一番大きな裏切りは、特攻で戦死した純真無垢の若者や少年達を「犬死に」と、吐き捨てるように言った奴等です。これは絶対に許せない。理不尽な戦争に巻き込まれて人が死んでいるのです。しかも純真で生一本な若者ほど死んでいるのです。純真な気持ちで祖国を守ろうと戦争に行って生き残った人ほど暴れ狂いました。私もその中の一人でした。

今でもあの戦争に行った人達は、戦争に加担したとしか受け止められていないようです。

なぜあの人達が残した言葉に真摯に耳を傾けようとしないのか。

戦争が終わって暫くは仕事に熱中していましたが、「特攻くずれ」などと言われたりしたこともあって戦争のことは余り口にしませんでしたが、時間が経つにつれて「戦争は二度としてはならない」との思いが強くなってきました。勝利を信じて「やるか」「やられるか」の戦闘を続けてきた同期生１３１４名は学問のみならず、人間的にも優秀な若者ばかりでした。その約半数の５００余名が、18歳、19歳の若さで戦死して逝ったのです。

戦争を回避できる道はあったはずです。

平和な世の中がいつまでも続くことを祈念しつつ・・・・。

25戦隊少飛12期・生き残りパイロット

飛行第25戦隊・谷口軍曹

漢口 飛行場にて

一式三型（隼）戦闘機の機上にて

特集 特攻インタビュー（第６回）
陸軍航空特攻 堀山久生 氏

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
特攻ライブラリー取材スタッフ

「編注・当会では、特攻に関連する史実とその精神を後世に伝承するため、特攻関係者の体験談等を取材し、記録することを企画し、有志会員による「特攻ライブラリー」を立ち上げ、先ず、関係者のインタビュー記事を記録することにいたしました。特攻出撃の如何を問わず、特攻体験をされて九死に一生を得た方、特攻出撃を待機された経験のある方等で、映像と写真を含めたインタビュー取材を引き受けて頂ける方がおられましたら、自薦他薦を問わず、当会事務局（担当大澤）までご連絡下さい。」

堀山久生氏

◇　◇　◇

堀山久生氏軍歴（略歴）

陸軍士官学校第五十七期　陸軍中尉
第三十戦闘飛行集団　館林集成教育隊　第一九四振武隊長

◇　◇　◇

○特攻ライブラリー取材スタッフ
（五十音順）

及川　昌彦　世話人
神崎　夢現　進行
倉形　桃代　記録
提橋　律子　世話人
須貝　智行　写真撮影
高橋　暢　映像撮影
長尾　栄治　インタビュアー・構成

◇　◇　◇

満開のしだれ桜の下で取材スタッフと一緒に
(22. 4.10　光が丘の自宅マンション前で)

◆軍人の家庭に育って

――幼少の頃の思い出は何かありますか？

堀山：昭和３年頃、父の勤務で北朝鮮の羅南に住みました。国境守備を担当する第十九師団の主力の駐屯地で、父は陸軍経理学校出の歩兵第七十六聯隊の主計大尉。軍旗祭などに幼稚園時代の思い出があります。その後、昭和６年、父は善通寺の第十一師団経理部の主計少佐で予備役編入。上京して昭和８年から杉並第五小学校、東京府立四中を経て、陸軍士官学校に進みました。最後の「市ヶ谷台」組で昭和16年４月、陸士の予科に入校。昭和19年４月、本科卒業です。

小学校の一番の思い出は、丸亀の城西小学校３年の時に祖父に連れられ、兄と明野陸軍飛行学校を見学し、教官の奥山清蔵中尉（少候５期／終戦時中佐／第十練成飛行隊長／淡路）に、八八式偵察機に乗せて頂いて「飛行将校」になろうと決心しました。飛行帽をかぶせて頂き、奥山中尉との機上の写真もあります。

――陸軍軍人を志したのは、お父様の影響が強かったのですか？

堀山：堀山家の系図は、南朝の忠臣・北畠親房から始まる伊勢の国司・北畠家九代の家臣で、昔は武士の家で、父も陸軍将校でした。当時、軍人の家庭は家督継承のため、長男を残して次男以下を軍人にしたように思います。浅草の大正館で早川雪洲のトーキー映画「大楠公」を見て、楠木正成・正行父子の別れの場面で泣いた記憶があります。小学校６年で１年、膿胸で休学しましたが、中学４年から陸士に入りました。

――陸軍軍人を目指したのも自然な流れで。

堀山：当時、私の入った府立四中（現・東京都立戸山高校）は陸士・海兵への合格者が特に多かったと思います。また、陸軍のお覚えが良く、「配属将校の第一号」は府立一中（現・東京都立日比谷高校）ではなく四中で、近衛歩兵第一連隊から派遣されました。陸士は東京地区では私立の場合、成城中学校が一番多いですが、府立は四中でした。最近、後輩の大東信祐君（戸山高／防大１期／普通科／陸将補）が、明治以降の陸士への入校者を調べたところ５７０人もいます。大将は東條英機

さん。陸軍特攻の富嶽隊長西尾常三郎少佐（航士50期／重爆）や海軍の神雷特攻の野中五郎少佐などがあり、戦争文学では、陸軍は「ビルマの竪琴」の竹山道雄さん、海軍は「戦艦大和の最期」の吉田満さんがあります。

――その後、陸軍予科士官学校から本科である陸軍士官学校に進まれるわけですが、その時、兵科というのはご自分で決められるものなのでしょうか。それとも、命令で決まるのですか？

堀山：一応は志願で、決定は学校がしました。私は膿胸が祟って航空を撥ねられ、広島の野砲兵でした。希望が通らず、大泣きする悲劇もありましたが、皆、やがて治まりました。

予科士官学校では歩兵の訓練が中心で1年3カ月、隊付（たいづき）3カ月、本科は1年7カ月、予科・本科合わせて3年1カ月です。生死を誓う同期生の3年間の裸の付き合いですから、裏表はありません。予科時代は提出日誌の裏表紙に「従順」と書いた位、素直ないい生徒でした。高谷武区隊長（50期／東京幼年／歩兵科2番／恩賜／歩兵39／陸大／陸将補）に可愛がって頂き、夏休みに新婚のお二人と私服で府立一中出の原田健一君と奥多摩に4人でハイキングに行きました。こんな話は誰もちょっと信用しないでしょう。

広島の隊付では三瓶山で10センチ榴弾砲の実弾射撃の指揮を取り、規則通りの射撃が立派に出来ました。当時（昭和17年夏頃）は、大東亜戦争の勝ち戦で、我が第五師団はシンガポール攻略の大砲兵戦で、ジョホールバルの北岸から「機動90式野砲」、陸軍唯一の砲口制退器付の長距離野砲で1万２８００ｍで射撃号令をかけたら近くの野戦重砲が驚いたそうです。塔の3階にあった目標の敵の観測所に見事に命中したなど52期の先輩に吹かれ、一生懸命に射撃は勉強しました。

本科時代は少しぐれまして、馬来祥介区隊長（53期／東京幼年／野砲7／陸大／陸将）に逆らい大変失礼しました。本科時代は射撃は巧かったのですが、学業、操行はよくありません。自由にやっていましたから。まあ、ご想像下さい（笑）。

予科士官学校時代の日誌

隊付の頃（左端 堀山氏）

隊付の頃

操縦学生の頃

◆転科命令に大ムクレ

――士官学校を卒業される頃、野砲兵から航空兵に転科とあるのですが、ご希望してそうなったのですか。

堀山：これは57期だけですが、本科在学中に１２０名を陸士始まって初めて航空士官学校に「転校」させた第一次航空転科があり、航空兵力の不足に対応しました。第二次の「航空転科」は前の期からありましたが、卒業１５５０名中、大量の４００名を実施。「転校」は志願。「転科」は命令でした。この第二次「航空転科」組……座間から転科した者を「座間転」と呼びました。何となくちょっと劣等感がある呼び方でしたね。

――命令で航空に移ったわけですが、その時のお気持ちは？

堀山：私は航空に未練があり、志願して一次に肺活量で撥ねられ、二次で戦闘機になりましたので、心の中では満足していました。他の人は大ムクレで、「何のために今まで本科で苦労したんだ！」「俺たちが今から行っても操縦に1年かかる。その間に日本はどうなる。特操（特別操縦見習士官）を増員すべきだ」「俺たちの地上戦力がもったいない」と大騒ぎでした。

もう一つは、「所属の兵科に捨てられた」という僻みでした。これに対して牛島満校長は「間違った考えかもしれんが、４００の諸子を航空にやるのは惜しいような気がする。しかし皇国のためだ。行ってくれ」と言われ治まりました。温かいお言葉に皆、泣きました。不満も吹き切れました。所属の中隊長や区隊長、教練班長などの「やあ、おめでとう」などのしらじらしい言葉なんてクソ喰らえでした。しかし、上司もそれしか言えなかったのでしょ

うね。300名の操縦の中から18名が沖縄特攻で散りました。当時、沖縄の軍司令官だった牛島中将の許に、同期生は少しでも助けにと散ったと思いたいです。

――転科で、もやもやした気持ちのまま士官学校の卒業式を迎えたのでしょうか？

堀山：昭和19年4月20日、天皇陛下の行幸を仰ぎ、座間の「相武台」で卒業式が行われました。もう、その頃は皆、胸の中で落ち着いていました。その卒業式の閲兵の際、陛下は我々、野砲兵に二度もご答礼されました。私は驚き、「陛下は57期に頼んでおられる！」と直感し、「一死君恩に報ぜん」と決意したのです。軍人勅諭の精神が脳裏に閃きました。座間で多少ぐれていた私は正気に戻りました。士官学校の教育は正に、私に有効だったわけです。

――卒業して第96期召集尉官操縦学生になりますが、これはどういう制度なのでしょう。

堀山：当時は陸軍士官学校を卒業すると将校勤務見習士官になり、各兵科の実施学校でさらに訓練を受け、3カ月後に陸軍の現役の少尉に任官し、将校の生活が始まります。航空に転科した者は熊谷陸軍飛行学校に派遣され、6カ月基本操縦を習い、また戦闘、偵察、爆撃、襲撃の分科の飛行学校で乙種学生として実用機の教育を6カ月受けて、部隊に配属され、さらに飛行技術を練磨、仕上げをするわけです。

400名の内、100名は偵察、航法、武装、気象に行き、約300名が操縦に行きました。操縦になった我々は、熊谷陸軍飛行学校が当時、特操2期の教育で手一杯となり、教育を委託した陸軍航空士官学校に入校することになりました。思いがけず、転科の操縦の我々は、東京の市ヶ谷台の陸軍予科士官学校の最後の入校生、埼玉県朝霞に最初の移駐をした第1期生、次いで神奈川県座間の陸軍士官学校に学び、最後に埼玉県豊岡の陸軍航空士官学校と、4つの士官学校で学ぶことになったのです。ただし、転科の操縦学生としては、熊谷の一連番号の「96期操縦学生」で整理されますが、私は狭山飛行場で飛竜隊（21中隊）2区隊でした。約300名は狭山が200名、高萩が22中隊で100名でした。教育内容はどちらも同じです。

九九式高等練習機

一式戦「隼」二型

四式戦「疾風」

◆一人の殉職者も出さなかった「座間転」

――航空の勉強は大変でしたか？

堀山：大変ですが、航空は自己責任で失敗したら即、死です。で、皆、懸命に努力しました。航空兵力の急速拡充の時なので、航空本部は、一割死んでもいいから基本操縦は九五式中間練習機を略して、いきなり九九式高等練習機で我々をテストしました。ですから他の人のように、二枚羽の赤トンボを知りません。しかし、九九高練は九八式直協偵察機を練習機に立川飛行機が改造したので中身は実用機です。一遍に皆、気に入り、文句もなくなり、嬉々として操縦に励みました。昭和19年4月21日から9月16日に修業を終えるまで、我々57期の「座間転」は1名の殉職者も出さず、東條さんも喜んだようです。

航空士官学校には55期の作った「航空百日祭」という名歌があり、陸軍らしくない、むしろ旧制高校の逍遥歌風のメロディーですが、ゆっくり歌うところがいかにも「航空兵らしい大空」を思わせて、ちょっとしんみりしました。座間にも56期が作った「ああ相武台の名に負いて」という長いけど、いい歌があり、始めは地上への郷愁も

天龍時代 後方に富士山が見える。

あって、それを愛唱していましたが、段々「航空百日祭」の方を歌うようになり、心も航空転科を受容したのでしょう。

航空士官学校を修業すると、操縦は各飛行分科に従い各飛行学校に入校します。戦闘は近戦が明野、遠戦が常陸、偵察は下志津、重爆は浜松、軽爆と襲撃は鉾田で、実用機の修業の６カ月、将校学生の乙種学生で教育されます。私の場合、昭和19年９月26日、明野陸軍飛行学校（昭和19年６月から作戦任務を付与され、明野陸軍教導飛行師団）に入校し、新設の富士飛行場で３カ月が九七式戦闘機。次の３カ月を天竜飛行場で一式戦闘機二型で戦闘機の戦技訓練を受け、昭和20年３月30日に修業し、作戦補充要員となりました。戦闘機の飛行学校である明野は、防空戦闘と夜間戦闘を水戸に56期から分校で分け、57期から常陸陸軍教導飛行師団に昇格させましたが、専用の戦闘機は二式複座戦闘機くらいで、他は明野と同じ単座戦闘機を使用しました。

天竜時代の地上訓練

◆特攻隊に志願

――昭和20年初頭に航空総監菅原道大中将から「特攻志願の件に関する檄文」が配布されたということですが、その書類をご覧になりましたか？

堀山：現物は見ていません。特攻志願は昭和20年１月と、３月の２回あり、白い紙片に「熱望、希望、希望しない」の３種が書かれ、巷間言われる「一歩前へ」はありませんでした。久保幸夫教官（53期／戦闘／二十四戦隊）からも、あまり細かい説明はなかったように思います。天竜の座間転の乙学44名は全員特攻の志願を出しましたら、久保教官は「俺はもう、貴様たちにはガッカリした。俺が教えているのは将来の戦隊長要員として空中戦に勝てる者をと思って教育しているのに、皆が特攻を志願したら、日本の後の戦闘隊はどうなるのだ」と言って嘆かれました。

戦闘機操縦者として一人前になるには５００時間と聞いており、我々は未だ１５０時間なので、今の戦況ではゆっくり５００時間まで教育を待てない。空中戦闘は航士57期にまかせ、俺たちはイチかバチか「体当たりで敵艦を撃沈しよう」と思い、全員が志願したのです。それに、士官学校では戦場で危急の場合、士官学校出の将校はイの一番に最も危険な任務に率先して就くべきだと教えられており、それが軍隊の中核になる現役将校の取るべき道でした。特操や幹部候補生などの予備役の将校は、文部省の教育で「人生をいかに生きるべきか」を教えられるが、我々、陸軍の正規将校はそれらと違い、「いかに生き、いかに死ぬべきか」まで３年間の教育で求められて来ました。久保教官は我々を可哀想だと思ってくれたかも知れませんが、我々は自分の身の程（実力の程度）を知っていたので、「久保さんは分かっていないな」と思いました。

――特攻というのは、上の偉い人が下に押し付けるというイメージがありましたが、今のお話を聞くと全然違いますね。

堀山：53期の久保さんの頃は良かったんです。だけど、「今、この国がこんなに負けかかっている時に、俺たちがやらんで誰がやるか。特操の連中だって皆やってるじゃないか」と、非常に心が綺麗でした。

――明野時代、堀山さんが自宅に帰られた時、お父様に口答えして、「だったら僕は特攻に行って精算してやる」とおっしゃったそうですが、その辺りをお聞かせください。

堀山：父は僕に期待してくれていました。それが、僕は怠けて本当に士官学校の成績は悪かったのです。当時、父は陸軍糧秣本廠の主計中佐で、どこで見たのか成績がバレて、夕食の際に大叱られ。それに、転科後の基本操縦時代に運が悪くて、狭山の基本操縦で九九高練を１週間に２機、着陸で大破させ、富士では九七戦で空中接触し（相手は無事）、落下傘降下（機は空中で炎上）で３機大破していました。叱られた時に素直に謝らず、「座間ではサボり、申し訳ありません。航空に転科後も３台壊したので、この上は特別攻撃隊に参加して、見事にこの償いをしますから許して下さい」と言いました。

いくら軍人でも、息子に「そうせよ」とは親子の情で言えず、ただ「しっかりやれ」とだけ言いました。

「いかに忠義の臣でも、親孝行とは言えない息子」でした。それを母は根に持っていて、戦後に「あのまま、お前が死んでいたら、お母さんは一生、お父さんを恨んだ」と言われました。もし、本土上陸作戦で体当たりをしたとしても、結局、負けてしまったでしょうから、母に責められる父を仏壇の中から見ずに済んで本当に良かったと思います。こればかりは陛下の終戦のご決断に感謝申し上げる次第で足を向けて寝られません。21才の若気の至りで、お恥ずかしい一席です。

◆地上で死ぬより特攻で

――乙種学生を終了して作戦補充要員……実戦部隊からお呼びがかかり、転属するのを待つ身になったのですね。

堀山：天竜飛行場では昭和20年3月30日の終了前に、第一、第四十教育飛行隊に2人、特攻に2人出て行き、残り40名は飛行場を分散、秘匿するための土木工事をしていました。

――待っている間、特攻隊に行くという気持ちが強かったのですか。それとも、通常の戦闘機隊に行きたいという……

堀山：射撃の成績が30発60点満点で13点と、よくありませんでしたが、戦闘機隊に行けたらとは先ず思いました。しかし、本心は、もし敵が上陸した時、こちらの飛行機がすべて焼かれてなくなっていたら、飛行場の兵隊たちに鉄砲を持たせても、とても戦闘などやれません。歩兵とは比較にならない弱兵で、そんな者を地上で指揮して死ぬなんて、航空転科の意味がまったくなくなります。どうか飛行機にありつきたいと考えていました。

――そうしているうちに、第十六飛行団付という命令が下ったそうですね。

堀山：他の飛行場の同期生の特攻は昭和20年5月3日発令と言いますが、5月5日、兄が天竜に会いに来た時は未だに命令は来ていなかったから、その後だと思います。3人の発令（室山五男、松田二男、堀山久生）を先ず久保さんが間違えました。十六飛行団は茨城県下館飛行場で第五十一戦隊と第五十二戦隊が戦力回復中で、「どの戦隊か後命を待て」と四式戦隊への内命を喜んで下さり、安心して飛行機分散の土木工事に励んで一週間が過ぎました。松田二男と言う男は気が利く男で、天竜の通信隊に頼んで明野本校に照会してもらったところ、本校からは「なぜ行かぬか」との返事。20日昼、疎開児童に見送られ天竜を出て、21日に下館に出頭。山田邦夫中佐（十六飛行団長）に、「遅い上に身辺整理もせずに来るとは何だ。貴官たちは特攻要員だ。ここは1名だけでいい。東京で2人あるかもしれぬ。すぐ行け」と大叱られ。野田毅少佐（48期／部員）が「市ヶ谷の第三十戦闘飛行集団で聞け」と言われ、下館の同期生にも会い、一泊して22日に市ヶ谷に出頭。そこでも編成は完了と言われ、明野に帰る他なし。

ところが、松田はしっかりしていて女子事務員に聞くと、成増で隊長2名が未着と言う。「助かった」と改めて申し出て、新藤常右衛門大佐から松田は一九三、堀山は一九四ということで、私は「仮編決と号一九四飛行隊長」を命ぜられました。これはもう沖縄特攻ではなく、本土決戦の特攻隊長でした。着任が遅れて明野に戻されては将校の面目が立たない2人は、自分で特攻に割り込んだわけです。その時の気持ちとしては「ああ、やっぱり特攻か。防空戦闘隊なんて話がうま過ぎたよ。でも四式戦闘機の特攻隊長なら有難い。もう言うことはない」と朗らかなものでした。でも、当時は陸軍の人事も大分、乱れていたことが判ります。特攻隊の編成は、隊員は飛行戦隊に一応配属し、その戦隊で振武隊を編成します。第一九四振武隊は飛行第四十七戦隊で、隊長が着任して部下を掌握した昭和20年5月23日が編成日になります。

◆特攻隊長になったことを知った家族

――市ヶ谷で特攻隊長を命ぜられた5月22日の晩、自宅に帰られたそうですね。

堀山：22日、荻窪の自宅での夕食時に、陸軍中野学校の教官の柳沢五子（いつたね／53期／歩兵）さんが遊びに来られ、「今度は成増の飛行隊」と言ったら「小隊長くらいかね」、「いや、もっと偉くて振武隊長です」と私が言ったので驚かれ、姿勢を正して「久生君、おめでとう」と言い、皆ビックリ！

父はただ「しっかりやれ」と言いましたが、母は「一度も要撃に上げず、いきなり特攻とは酷い。お母さんはそんなのは嫌だ」と言いました。母は宇治山田の女学校出で、同じ三重県の明野が戦闘機の飛行学校で、殉職者の多いことを若い時に知っていました。皆、夕食が喉を通らなかったかも知れません。成増から館林に移動後、毎週金曜日に自宅に帰れて、突然いなくなって心配させないよう「来週も帰るから、

天竜に面会に来た兄（右）と一緒に

この靴下を洗っておいて」と預けて帰っていました。母は井戸端で私の靴下を洗いながら泣いたそうです。亡くなる前に聞いて母親の愛情に感謝しました。陸軍の主計中佐夫人でもこれなのに、一般の家庭の母親は息子が特攻隊員になって、爆弾とともに敵艦に体当たりして、木っ端微塵に砕け散る運命を悲しまぬ母親はいなかったでしょう。私は母が23才の子で、当時、私は22才。母はまだ45才でした。昔の女性は大変でした。

しかし、特攻の発令後は、自分はもう親子兄弟を思わず、ただ任務達成に邁進し、死も隣りの部屋に襖を開けて入るくらいに恐くなく、世の中の事もまるで余所ごとで眺めているような感じでした。肉親の愛情よりも、お国のため、今、与えられた敵艦撃滅の任務を達成するための努力の方がすべての前にありました。

両親

――成増に着任されて、正式に第一九四振武隊が編成されたということですが、何か辞令のようなものはあったのですか？

堀山：航空隊では一度も紙に書いたものをもらいませんでした。明野の唯一の記録は昭和20年2月の俸給の明細書です。あとは皆、口頭でした。

――その後、館林に移動されたのですね。

堀山：申告後、館林の受け入れ準備完了次第、移動するように言われました。成増は本来、飛行第四十七戦隊の飛行場で本隊は知覧や都城で沖縄戦を戦い、当時は山口県小月で奮戦中でした。成増には留守隊がいて、松田、堀山の特攻編成の申告はその留守隊長にしました。

◆隊長としての部下への接し方

――特攻隊長として、部下への接し方に気をつけたことはありましたか？

堀山：生まれて初めての隊長ですので、部下から申告を受けた際は、ちょっと演出していかにも偉そうに「おう、待っていてくれてご苦労だったな」と、でかい態度をしました。指揮官は初めて部下を持つ時の態度が大事。オタオタしていては部下に嘗められ、後で困ります。で、地上部隊のやり方で済ませたのです。何、部下はコチコチですからわかりません（笑）。予備役の副隊長がまだ来ないので、「現役の将校と現役の下士官だけ5人でやろう」と言いました。陸士と少飛（少年飛行兵）は現役で、指揮には嘘のないことと、公平、愛情が必要です。私は父に子供の時から写真を習い、館林では少飛出身の4人の伍長に、私の陸軍中尉の服装に将校の軍刀を白い手袋で持たせ、写真を撮ってやりました。伍長が特攻戦死すると少尉になりますが、その時は写真に残す身体がありません。皆、自分の将校姿に大喜びでした。館林に到着して酒井隊長から、「9月下旬までに訓練を完成して、北九州に展開すべし」との内示を受けましたが、誰にも言いませんでした。夏になって辞世の歌を作りましたが、9月末が命日と思っていましたから、「秋空や　純忠の義に　雲を越え」としました。

もう一つ、少々長い話で恐縮ですが、副隊長着任の話をしましょう。上田克彦少尉と言い、大正7年生まれの飛騨高山の材木屋さんの息子さん。私は中尉で大正12年生まれ。5才上で北海道大学農学部林学科卒、帝室林野局員。第二十一振武隊で一式戦三型に乗り、昭和20年4月12日、知覧を出撃して徳之島に前進。ところが、そこで飛行機を焼かれて5月末、福岡に帰還。明野から再配属というおとなしい方でした。写真結婚と言って、花嫁衣装の新婦の隣には、飛行機服の新郎の写真のみの結婚式。聞いて気の毒に思い、「上田さんお気の毒で、奥さんをこちらに連れていらっしゃい。部隊で吉川旅館に一部屋準備してもらい、今度出るまで一緒にお住みなさい。それから4人の少年飛行兵をお預けしますのでよろしく」と言い、少年飛行兵には今まで現役だけでと言ってきたので、「上田少尉は特操の1期だが、北海道帝国大学のご出身で帝室林野局の役人。すでに二十一振武隊員で沖縄に出撃され、我々より技量は上だ。尊敬せねばいけない。今後、お前たち4人は上田少尉に預けるから、何かあったら上田少尉を通じて俺に言ってこい」と言い渡しました。可愛い奥さんも到着。20才以下の少年飛行兵は皆、上田少尉のとこ

ろに行き、我が隊は明朗でした。

しかし、私は厳しいこともあり、ある時、４人の部下の銃剣を見たら埃だらけ。怒って、他隊の前で「一九四振武隊は銃剣を持って来い」と言いました。４人は途中で軍服でもこすれば、少しは埃も取れるのですが、そのまま持ってきた。「さすが、現役下士官は陸士並の精神教育を受けているな」とホロッとしましたが、ほめるわけにもいかず、一発ずつ鉄拳を振るい、「少年飛行兵の伝統の名に恥じよ。30分後、再点検する」と言って点検を終わりました。でも、その後は、いつもと同様、私の落下傘の縛帯を飛行場まで持って来てくれました。悪いことをすれば殴られるのは当然の世界でした。飛行訓練の場合、操縦の操作が悪かったらぶん殴り、館林の戦闘隊も殴りました。

館林時代

司令部偵察機の特攻の連中は、「戦闘機隊は殴られている」と怖がったと聞いています。

――館林で初めて四式戦に乗られたということですが、慣れるまで時間がかかりましたか？

堀山：ただ乗るのなら、飛行時間があればそう難しいとは思えませんでした。しかし、一式戦のエンジンの馬力の1・5倍で、２０００馬力近い四式戦は胴体が太すぎて、乗せられているといった状態で、操縦が手に入ったとは言えなかったと思います。

――それまで、九七戦、一式戦「隼」、四式戦「疾風」などを乗り継いでいらっしゃいます。それぞれ長所短所があると思いますが、一番乗りやすい、好きな戦闘機はありますか？

堀山：好きなのは「隼」、一式戦二型

第194振武隊（後中央 堀山氏）

でしょうか？４機編隊で離陸上昇中、脚を入れる時、車輪が左、次が右と胸を抱くような形で収められ、見とれていました。

――特攻隊に配備される飛行機は旧式のものが多かったと聞きますが。

堀山：とんでもない。館林の四式戦は中島飛行機の太田工場から、全くの新品を72機もらいました。全員が計器盤から飛行時計を外し、首にぶら下げていました。

――操縦も大変でしょうけど、航法の習得も難しいのでしょうね？

堀山：狭山では基本操縦時代に一辺20分の三角航法を実施。狭山―秩父―皆野―狭山だけで、それは、まあ無事に出来ました。知覧から沖縄の距離は約７００㎞で、２、３時間の目標もない洋上航法は大変だったでしょう。本土

堀山中尉の将校服を着た
194隊員の記念写真

決戦の場合は敵の上陸を待つので、もっと近くで少しは楽だったと思いますが、結局、出撃しなかったので腕前は分かりません。小型円形の航法計算盤ももらい「推測航法」の教育を受けましたが、敵戦闘機の見張りをしつつ右手で操縦桿を、左手で計算盤を扱っても正確に扱うのは至難と思います。誘導に別に飛行機が必要だったでしょう。日本海軍の戦闘機はどうしたのでしょうか？

――「沖縄へ出撃」と言葉では簡単でも、実際にたどり着くのは大変だったわけですね。

堀山：正確に着くのは、それは大変です。たどり着く前に敵の邀撃を避けねばならず、目標が移動すれば又、位置が不明です。おおむね程度の航法なら頭のいい奴の例があります。航士57期の結城造君（第四十二振武隊）は、種子島まで２時間、南へ飛び、そこで西に30分飛んで徳之島に着いた由。１００kg爆弾で巡航速度１４０㎞と言うので、もっと速いのでは？と尋ねた記憶があります。

◆特攻訓練マニュアル

――この「館林の空」（**※注１**）という本を読んで初めて知ったのですが、特攻隊の訓練について詳細なマ

ニュアルがあったのですね。当時、こういうものが配布されていたのですか？

堀山：「館林の空　資料編」に掲載した「と号空中勤務必携」は、戦後、友人の押尾一彦（四式戦研究家）から頂いたもので、昭和20年５月作製とあります。これだけ立派な内容は多分、熊谷陸軍飛行学校が航空本部の指導で作ったのでは？と思います。超低空水平攻撃の場合のデータは百式司偵、九九軍偵、九八直協らしく、下志津飛行学校の作業に見えます。これで訓練した隊もあるでしょう。それを知りたいと思います。

　我々、第三十戦闘飛行集団は、本土決戦に備え「館林集成教育隊」を設けて特別に集合教育を徹底し、四式戦12隊72名、百式司偵10隊32名（機上通信８名含む）、キ１１５特攻３隊、合計１２２名の特攻隊員がおりました。おそらくは当時、一飛行場にかくも優秀機ばかりの特攻機を多数集めた特攻基地は他にないでしょう。

　19人の特攻隊長は「と号部隊戦闘要領」をもらい、それで訓練をしましたが、各地に分散されていた特攻隊長は多分、持っていないのではと思います。その中に、「特攻隊の本領は、生死を超越し、真に捨身必殺の精神と卓抜なる戦技を以て、独特の戦闘威力を遺憾なく発揮し、航行又は泊地における敵艦船艇に驀進衝突し、これを必沈して敵の企図を覆滅し、全軍戦捷の途を拓くにあり。而して本攻撃成功の根基は、実に空中勤務者の精神力に存す」とありました。加えてさらに、厚さ３㎝位のＢ５版左横綴じの「敵艦船識別法」という、敵の軍艦、船舶、飛行機の三面図に、写真、性能、要目のある本も資料として配布されました。特攻については他にも、軍司令官クラスの上級指揮官用には「高級指揮官のと号部隊用法」があったようです。

――堀山さんも配布された書類に基づいて訓練計画を立てたのですか？

堀山：昭和20年５月初めから館林に先着し、訓練を開始した第一八一、一八二、一八五、一八六振武隊の４隊・第一組は当然、攻撃計画まで出来て、関東平野で高度１００ｍでの低空航法や羽田沖の仮設目標に対する超低空攻撃の訓練を済ませていました。実際、私が６月３日に着任した際、館林飛行場の北の、東武鉄道小泉線に沿った松林を掠め、さらに高度を落として10から15ｍ位を時速５５０～５８０㎞で南に飛び去る四式戦の姿は凄い気迫でした。その姿に、「歩兵の突撃もかく在るのか！」と感動し、アルバムの四式戦の写真の下に「我等の突撃機」と書き込んだ位です。私は配属が遅く、四式戦12隊の内、第一組の４隊の四式戦特攻のようには未だ特攻の本格的な訓練に入れず、第三組の４隊で一九四が最後、ようやく編隊飛行の程度でした。残念ですが、私は超低空を一度もやらず、体験のない突入訓練に嘘は言えません。

　教育で面白い事がありました。中学時代入手した「海と空」の臨時増刊で、「商船の形態」という東京高等商船学校（現・東京海洋大学）の教授の本があり、内藤博弼君（第一九二振武隊長／57期）の「精神訓話」と引き換えに、これで２隊を教育しました。「陸軍の攻撃目標は軍隊輸送船で、商船と同じ船首楼、船橋楼、船尾楼と絵の如く３個の山が特徴だ。これを『スリー　アイランド　ベッセル』と言う。『三島型船』である」と教え、後で試験をしたら、皆、英語の方で答えが出ました。「精神訓話」を他人に頼むのはどうかと思いますが、内藤君は広島幼年学校出身の立派な精神家でしたから。

　その後、隊のことは上田少尉に任せ

館林基地上空を飛ぶ四式戦

副隊長　上田少尉

194振武隊員
愛機をバックに

て、すっかり手を抜き、一生懸命に「体当たりの方法」を研究しました。指示された部隊の訓練は「超低空喫水線上水平攻撃」ですが、せっかくの250kg爆弾2発のエネルギーを無駄に空中に飛散させるより、水面下に入って水中爆発させれば、これでも海軍の800kgの魚雷に似た大きな効果が得られるはずだ。最初に海面に入る時に瞬発信管を短延期信管に切り換えておいて、0・何秒か後で爆発させれば手前で水中爆発でもいい、多分大量の海水が侵入するか、輸送船の舷側を突き抜けた後ならボイラーも爆発し、敵の1万トンクラスの軍隊輸送船なら一挙に、敵兵千人、戦車、重砲、武器、弾薬多数を轟沈出来るのではという結論に到達しました。6月頃、第三十飛行集団の高橋太郎参謀（50期／少佐／飛行第九八戦隊長／台湾沖航空戦に四式重爆（飛竜）を雷撃機として参加、一撃でほとんど全滅）に館林飛行場でこれを意見具申したら、「面白い。考えて返事しよう」と言われました。ところが7月に第三十飛行集団は市ヶ谷から熊本・健軍に移動。多忙でご返事はなし。部下には私のやり方を強要出来ずにいましたが、自分だけでもテストするつもりでした。陸士時代、戦術作業もあまり良くない成績でしたが、これは一生懸命に考えました。なにしろ自分の生命を賭けた一世一代の体当たり攻撃ですからね。ですが、実行に移す前に戦争が終わりました。

――自分でいろいろなアイデアを出して訓練方法や攻撃方法を考えられたわけですね？

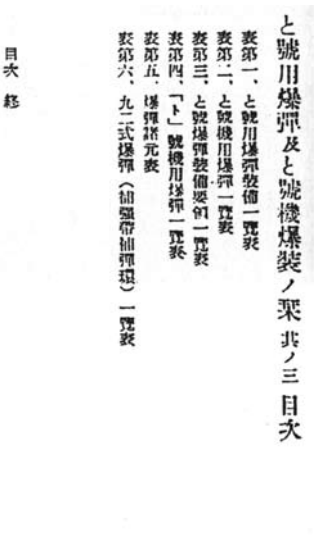
堀山：戦後、調べたら、私の考えが間違っていなかったと思わせる文献を二つ見つけました。一つは陸軍が特攻を考えた時、昭和19年11月に、第三航空技術研究所長・正木博少将が「捨身戦法における艦船攻撃の考察」を参謀本部に提出した中の、六つの攻撃方法の中で四つは「水面下爆発の有効性」が書いてあり、「然し困難で喫水線上を勧めて」おられます。戦後刊行の「戦史叢書・決戦兵器の整備―長期的研究の廃止」455ページを参照していただければと思います。「続・陸軍航空の鎮魂」という本にも、どこかにありました。

もう一つは海軍の話で、「造艦技術の全貌―わが軍事科学技術の真相と反省（1）」（興洋社）で、元海軍技術少佐の福井静夫氏が著述した第一部の中に「水中弾道」の記事が24ページにあります。廃戦艦「土佐」による防御実験の話です。当時、魚雷に対して十分の防御がされていたが、40センチ砲弾の至近弾が反跳せず、水中を進行して舷側甲板下を貫通し、水雷防禦壁を苦もなく突き破って機械室で炸裂し、大損害を生じた……浸水量は3000トンであった……。まあ、私の攻撃方法は戦術作業の「原案」を当てたようで嬉しくなりました。

――「水面下に当たる」という攻撃方法は結局、訓練するまでに至らず……

堀山：私もやっと2カ月位で、これでも一生懸命に考えたのですが、狭い一人の着想で止まりました。とても館林が皆、この方法を採用するまで発展は考えず、又、先に散った特攻の先輩のそれぞれにあった着想も残っていないし、情報交換の場も

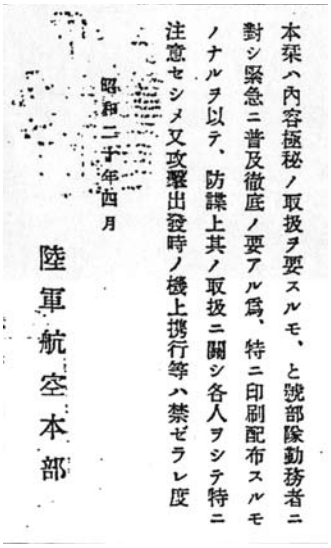
「と号用爆弾及と号機爆装の栞」
（特攻訓練用の教材の一つ）


と號用爆弾及と號機爆裝ノ栞 其ノ三 目次

表第一、と號用爆弾整備一覧表
表第二、と號機用爆弾一覧表
表第三、と號爆弾整備要領一覧表
表第四、「ト」號機用爆弾一覧表
表第五、爆弾諸元表
表第六、九二式爆弾（補强帯補弾環）一覧表

目次 終

「と号用爆弾及と号機爆装の栞」
目次


本栞ハ内容極秘ノ取扱ヲ要スルモ、と號部隊勤務者ニ對シ緊急ニ普及徹底ノ要アル爲、特ニ印刷配布スルモノナルヲ以テ、防諜上其ノ取扱ニ關シ各人ヲシテ特ニ注意セシメ又攻撃出發時ノ機上携行等ハ禁ゼラレ度

昭和二十年四月

陸軍航空本部

「と号用爆弾及と号機爆装の栞」
目次

なかったのです。

この「体当たり」については、百式司偵の特攻、第二七〇振武隊長の折原志津夫君（航士57期）から、戦後に聞いた珍しい話があります。ある時に海軍の将校から「敵艦の後部の舵やスクリューを狙っては」と言われたそうです。これは、昭和15年にドイツの戦艦「ビスマルク」を、イギリスの「ソードフィッシュ」という旧式の複葉の雷撃機が舵に魚雷を命中させて、「ビスマルク」はクルクル回ってフランスの軍港に戻れず、追撃してきたイギリス艦隊につかまり撃沈されてしまったのです。空母などは艦載機の離発着は高速力で直進せねばならず、舵やスクリューを破壊したら、空母の機能は停止し、後方へ退くにも駆逐艦数隻をつけねばならず、大戦果でしょう。中学時代に知っていたはずなのに……。館林の19人の特攻隊長が皆、合同で攻撃方法を議論することが全くなかったのは反省すべきですね。

――館林には19個の振武隊が集まって合同訓練したということですが、訓練自体は隊ごとに別々だったのですか？

堀山：館林飛行場は縦横１４００ｍの草飛行場で、四式戦の当隊の場合、一九一、一九二、一九三、一九四の４隊が格納庫の前で飛行訓練し、他に飛行機を見ず、他の隊の訓練を一切見ていません。上手に区分して使用したようです。

試験飛行の話ですが、57期の藤井常男君（第一八八振武隊長）が「重量物搭載」飛行を行いました。２００ℓの落下タンクに水を入れて、２個で４００ℓ。まあ２５０kg爆弾２発位の体験になり、大変、操縦の自由が利かなかったそうです。四式戦の性能は高度６４００ｍで時速６２４㎞ですが、「だんだん粗製濫造になり、性能も無理だろう」と、私も試験飛行で高度４０００ｍから角度35度、レバー全開で実行。計器盤で時速６２４㎞を視認しました。その際、急降下から上昇に転じるのに「トリムタブ」を使い、滑らかに上昇するのを体験しました。「タブ」は四式戦から初めてついて、場周離着陸時に使いましたが、他では使用の経験がなく、「おや、面白いな」と感じた位でした。特攻出撃で、超低空で行く時に、舵に敏感な四式戦は高度保持に苦労するはずですが、戦後に、航空自衛隊の戦史官の服部省吾さん（防大６期）の「操縦のはなし」という本に、タブを使い遠方の目標で高度10～15ｍをとれば楽に飛べることが書いてありました。なぜ56期の教官もそれを教えてくれなかったか……中島飛行機の技師も陸軍に上申してくれなかったか……惜しい事でした。トリムタブは、せっかく使えたのに残念です。超低空飛行の苦労が一つなくなったら、上空の警戒や編隊の調整など、もっといろいろ気を配れたと思います。

――館林時代は基地の外で生活をされていたそうですね。

堀山：特殊任務の戦力保全の意味もあり、隊員が空襲などで部隊とともに被害を受けることを考え、営外に分散させたのでしょう。振武隊は１４０番台から、12機編成の特攻隊を６機に分割し、兄弟隊とし２隊そろって同じ空いた旅館に泊まりました。これから３カ月で死ぬのだから自由な生活を配慮したのでしょう。それでバスが巡回して隊員を迎え、飛行場に往復してくれました。戦後、他の同期生に聞いても大体同様でした。館林は特に良くしてもらったかもしれません。必死必殺、肉弾体当たりの任務の部隊など、今までの陸軍にありませんでしたからね。

――航空士官学校出の将校と転科組の将校では、やはり違いがあったのですか？

堀山：予科は一緒ですが、航士の豊岡は多少スマート。地上の座間は垢抜けしない。でも、それほどの差は陸軍では出ません。海軍はずっとスマートと妹が言っていました。しかし、将校としての「基本的な志」は陸海軍とも同じです。ちっとも違わない。

私など師団砲兵で、しかも輓馬野砲で、まあ「馬方さん」が「パイロット」に大昇格したのだから野暮ったいのは免れない。飛行時間で遅れた分、多数は特攻になりました。飛行時間１５０時間の中尉では特攻でも難しかったはずです。豊岡の者も「転科は気の毒だ」と言いました。

――転科組が優先的に特攻に回されたというところがあったのでしょうか？

堀山：それは空中戦の戦技能力で分けたでしょうね。当然です。文句などありません。

――実力でそうなったと。

堀山：そうです。遅く航空になって、飛行時間が少なければダメなのです。でも、特攻は命中すれば効果は同じ。将校も下士官も戦果は一緒です。うまく当たれたら、もうそれで満足でした。

――戦記ものを読むと、例えば海軍なら、特攻隊員は海兵出よりも予科練出の方が多かったとか、予備学生の方が多かったなどと書かれていますが。

堀山：組織は三角形で、上は少なく中より下が多いのです。軍隊も社会も同

じ。特攻隊もそうです。軍艦の海軍は陸軍と違い、海兵は少なく、陸士は53期から大陸作戦の関係上、たくさん将校を準備しました。大東亜戦争で戦場が拡大した海軍は、初級将校を大量の予備学生を採用して穴を埋めたのです。同じ少尉で3年かけた者と1年の者では、どちらを残しますか？海兵の特攻採用は世間の常識の範囲のやり方だったと思います。でも当時は海軍の予備学生の方が、陸軍の特別操縦見習士官よりスマートで評判が良かったんですよ。

◆マークと隊名にこめた想い

――机の上の四式戦の模型がありますが、操縦席の近くに「194振」と書かれていますね。実際の機体にも同じように書かれていたんですか？

堀山：普段は書かず、出撃と決まってからです。この本……「館山の空」に、隊員が大きく番号を書いた写真がありますが、もうこれで最期だからと隊長が許したのでしょう。この模型は友人が精密に作ってくれたものです。マークは私が考えたもので、「194」の字を1、9、4に分解して爆弾に表し、敵の空母に我々の爆弾が命中して波間に沈めるという意味です。出撃まで訓練も進んでいなかったので隊員にも言っていません。だから、マークのことは隊員も知りません。

――マークだけでなく、第一九四振武隊の隊名も考案されたそうですね。

堀山：当時、番号の他に皆、隊名をつけました。私も「深山桜（みやまざくら）隊」としました。東京の三輪田高女の妹が女子挺身隊として大本営第二部にいました。そこに51期の渡辺正という地図係の参謀がいて、彼が陸士予科の区隊長時代、「花は深山の山桜　黙々咲いて淡々と　雲煙遠く世を眺め　万朶の桜と　薫るなり」という歌を作って、流行歌の「男の純情」の節で生徒に屋上で歌わせたという。妹は「黙々淡々」と言い、小生も同感。私の先祖が松阪で、本居宣長という有名な国学者の出身地でしょう。「敷島の大和心を　人問はば　旭に匂う　山桜花」……それで、これにしました。部下には「我々は深山の山桜のように人知れず咲き、人知れず、ただ任務だけを果たして黙って死んで行こう。戦果確認機はいらぬ」と言い、皆、賛成しました。第一九三振武隊の松田二男君のは「七生白虎隊」といい、天皇への忠臣・大楠公の誠忠の七生報国と、仙台幼年学校出身の彼は会津の白虎隊の忠烈とを併せたものです。百式司偵の第二七二振武隊の長沢隆徳中尉（航士／少尉候補生24期）は「轟隊」で、おそらく「空母轟沈」を祈ったのでしょう。

◆突然だった終戦

――終戦前後はいかがでしたか？

堀山：昭和20年8月5日、百式司偵の第二六八振武隊（梶川正夫大尉／陸士55期／卒業時の転科で既にベテラン／雲染屍隊）が千葉県・八街飛行場に前進し、見送りました。館林は全部、福岡の第六航空軍の指揮下と思っていたので、なぜ第一航空軍の八街飛行場に行くのかと見送りながら奇異に感じました。司偵特攻は第一航空軍に転用されたのか、よく判りません。

私は当時、知らなかったのですが、8月13日、14日頃には、四式戦特攻の一八一、一八二、一八五、一八六の4隊に九州への前進命令が出たり、取り消されたり、かなりの混乱がありました。第一八六振武隊の落合成郎君は「出陣食」というご馳走をいただいたと言います。「戦史叢書・本土決戦準備1　関東の防衛」の591ページには、8月中旬の航空総攻撃に、第六航空軍は全特攻を九州地区に集結し、8月15日から22日の一週間にわたり、同地区の全航空兵力を合わせて沖縄方面の敵に対して連続波状攻撃を加えることが計画されたとあります。8月15日は終戦の日で、準備と発動、終戦工作が交錯して混乱したのでしょう。でも、結局、館林の特攻隊は九州には出ませんでした。

――では、8月15日の終戦は突然の出来事でしたか？

堀山：前日の8月14日の晩、B29が飛行場に焼夷弾爆撃をしたのですが、館林中学の右手の3階の建物に宿泊していた我々は、焼夷弾の閃光に「原子爆弾か！」と毛布に潜り込んだのだからお恥ずかしい。玉音放送は中学校で全隊長が集まり拝聴し、全然内容は判らず、隊長の落合君が「ワッ」と泣いたので「さては負けたか！」……途端に目の前が灰色になり、そのままでは立っておれず、机にすがって「しまった。逝った同期生に死に遅れた！」とのみ思い、もう、それは皆、呆然としました。

――終戦から復員まではどうだったのでしょうか？

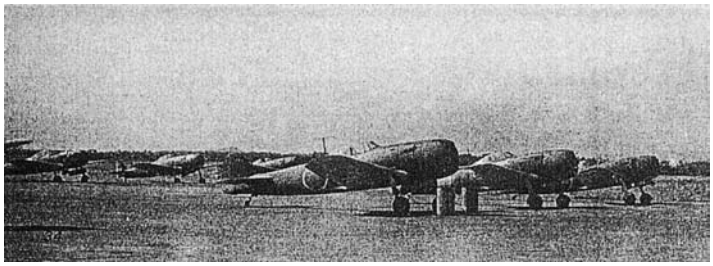
堀山：酒井剛集成教育隊長（陸士48期／歩兵第五連隊／航空転科／第三十戦闘飛行集団部員で比島作戦に従事）は、直ちに「承詔必謹」と「祖国再建」を説かれ、一同同感。混乱は全くなく、さすが当時、「私心」のない特攻隊長は立派でした。これはなかなか出来な

いことでした。

日本軍の飛行は禁止され、８月17日が最期の飛行の日となりました。「最後に乗りたい」と隊員が言いましたけど、私は部下を飛ばせませんでした。精神が動揺していて危険だと判断したからです。果たして他の隊で１名、郷里訪問で不時着しました。そういうのは名誉なことではありませんから、部下を飛ばせなくて良かったと思っています。８月28日、部隊解散の式に、敵のＦ４Ｕボートシコルスキーが館林飛行場に飛来し、超低空で我々を監視に来たのには悲憤の涙を拭いました。終戦当時、館林飛行場には四式戦が12個隊分72機、百式司偵の特攻４隊、キ１１５特攻３隊の分を含め80機くらいの飛行機がありました。予備役将校（幹部候補生、特別操縦見習士官）と現役下士官（少年飛行兵）は直ちに復員。我々、陸士出身の現役将校の隊長19名は下館の住吉旅館に移動。いったん自宅に帰り、再び戻り、９月27日に復員、帰宅しました。

194振武隊員の寄せ書き
終戦時のもので日本再建を誓った。

復員した頃。自宅前にて。


上の写真２枚は終戦直後の館林飛行場。特攻機約70機全部プロペラを外して飛行不能にした。

――終戦の８月15日を境に、軍人を見る国民の目が厳しくなったという話を聞きますが。

堀山：いくら日本人は軽薄といっても、そんなことはないです。昔から、「今どきの若い者は」と言われたものですが、当時、我々「特攻隊員」に言った者はありません。手を返したように、あなたはそんな事を当時の国民が我々に言えると思いますか？

――ご自宅に戻られてからは？

堀山：昭和20年９月27日復員。10月一杯は東北の有畜帰農講習会へ。ところがインフレが始まり、帰農は止めて大学受験に方針変更しました。11月から小平の進学講習会へ。そこでは陸軍の文官の教官などがいろいろ教えてくれました。でも、微分方程式など数学も大分、忘れていて理系を文系に変更。占領軍の軍学徒一割制限の下、昭和21年春、慶應義塾大学の法科に進学しました。父に叱られた前非を悔いて３年間勉強し、卒業の成績は父に喜んでもらえました。

――特攻隊長から大学生と環境が大きく変わったわけですが、心の整理みたいなものは特別にあったのでしょうか？

堀山：終戦の時、戦争に負けたのは悔しいが、祖国を再建し、昔日の日本を再現してやると決心したので３年間の勉強はその準備と決めていました。慶應１年の時、小泉信三塾長を「福沢先生研究会」の皆で訪問した時、海軍の青年将校の写真があったので先輩に聞くと、一人息子さんが海軍で戦死されたという返事でした。現役の特攻隊長が負けて大学に入れていただき、塾長の令息は亡くなっておられ、これには申し訳なく思いました。

――戦後、陸軍軍人だったことや特攻隊長を経験したことは役に立ったと思うことがありましたか？

堀山：陸士は私に最高の教育をしてくれたと思います。戦後、勤めた三井東圧化学で副社長（東大出身）が、「君には部下がついてくるが、彼にはついて来ない」と東大の同僚と比較された

こともありました。頭もある程度いい。体は良いし、金は間違いないし、実行力はある。会社の体制派からみれば、こんな使いやすい社員はなく、まあ、体育会系みたいなものです。

――軍隊体験と言っても、隊長として部下を持った体験は特別ですか？

堀山：そうです。同期生でも隊長をやった男と、やったことのない男では明らかに差があり、副隊長と隊長でも違うでしょう。隊長は本当に最終責任者ですから。逃げられないのです。

◆「館林の空」編纂

――堀山さんの戦争体験をいろいろ伺っているのですが、特攻隊の思い出を戦後、語られるようになったのはいつ頃からでしょうか。また、話したくないと思われた時期がありましたか。

堀山：悪事を働いたわけじゃないし、卑下して話せない、話したくないと思ったことはないです。若い頃は陸士の同期生の集まりの世話役で、軍隊のことは皆、お互い自由に話していました。あの犠牲的な行動を何も恥じることなどないと思います。反省ならいざ知らず、否定するなど……私など特攻と言っても、まだ半分位の隊長の分際で、散られた方を批判などどうして言えますか。

書いて残したいと思ったのは、51年間ブッ通して働き、77才で年金生活に入る時で、その後の人生の軟着陸のために「館林の空」を記録としてまとめて残そうと思いました。

――「館林の空」を編纂されて、一番、苦労したことは何でしょうか？

堀山：一つはメンタルな心情的なことは各人各様に任せ、「記録」としてなるべく広く正確に全体を述べることと、二つ目は１２２名の館林の特攻隊員の「写真の収集と完全な返却」でした。当時の写真はご本人にとって「宝物」です。苦労して集めた２５６枚を間違いなくお返し出来て、一番ホッとしました。

――メンタルな部分は極力排除する方針とのことですが、松田二男隊長の手記として、特攻命令を出した上層部への不満を述べた文章が載っていますね。

堀山：本当はその10年位前から、本文は松田君、１２２名の住所は木下勇君（府立四中四修／機甲兵／第二二九振武隊長／キ１１５特攻）、私は写真の収集と、役割を分担して準備をしていました。それが松田・木下の２人が相次いで亡くなり、私がすべてを行わなければならなくなりました。ところが、松田君の遺稿がどうしたことか全くなく、あの文章しかなかったのです。それに彼の上層部への批判は私も同感なのです。地上から佐官位で航空転科した参謀が飛行機の操縦も知らず、地上の図上戦術の感覚で飛行機の集中使用の原則や気象条件も判らずに「戦機に投じよ」と出撃を強制し、無駄死にさせたことを怒っているのです。観念論ではないのです。

◆慰霊と平和祈念だけでなく戦没者の顕彰を

――堀山さんもこの本で、いろいろ特攻についての所感を書かれていますが、改めて伺いたいのですが、堀山さんにとって特攻とはどういうものなのでしょう。

堀山：もし、特攻を行わなくてすむ戦況なら、私だって志願しません。こんな消耗戦術が続けられるはずがありません。当時、あの戦法以外に勝利への途がなかったから、私は進んで志願したのです。降伏せよと言うのですか？それは軍の上層部の担当です。第一線部隊の下級指揮官は死力を尽くして戦うだけです。

――特攻隊員としては出撃するのが当然という気持ちは理解できるのですが、送り出す家族の立場を考えたらどうでしょうか？送り出す立場からみれば、特攻も違った視点から考えなければならないと考えますが。

堀山：それはあるかもしれません……しかし、それでもだ！……それでもやらなきゃいかんと思います。そうしなければ一国は滅亡すると思う。親兄弟には心理的な大きなショックで、長期に国内が特攻を継続出来ず、政治の分野にも関係したでしょう。一億総特攻というスローガンも昭和天皇の御聖断で終わりました。これは当時の均衡の取られた処置です。しかし国民としては、やはり自国の危急存亡に際して身を捨てて、立ち向かう犠牲的愛国心を持ってほしい。国家の自由を奪われるのは御免です。家族のために若者が犠牲を甘受すべきです。でなければ誰がその抵抗をしますか？若者は運が悪かったのだと諦めてほしい。歴史はその繰り返しと思います。日本は、その危機の度にそうして国を守ってきたのです。私はそれをやっただけです。や

らない人の発言には同意しませんが。

――こうして堀山さんや他の人にお会いして、我々なりに特攻の事績などを理解して、さらに、次の世代まで語り継ぎたいと考えていますが、体験者として、我々の活動に対して、こういうことに力を入れてほしいなどの要望はありませんか？

堀山：特攻で死んだ人の名誉というのを尊重してほしいと思いますね。それで、その家族なんかにつらい思いとか、嫌な思いとか……悲しいのはしょうがない。悲しいのはしょうがないけど、こちらの言動で、そういう人たちが、つらいような気持ちになることは避けてほしいと思う。特攻を客観的に戦法として批判するのはまた別ですよ。それはやってもいいけど、その当事者に過酷な仕打ちをしないでほしいということですね。

今の日本の現状に対してですが、戦勝国は降伏国を、思想・言論は自由にしても、「歴史」は一国の精神の因るところ、戦勝国の方針に変えさせ、政治・経済・学問で分断政策を巧みに操れば、基本的には降伏国を再起不能にし、将来も従属が続くでしょう。民主主義は「神の思想」と言うほどにバランスが難しいと聞きます。「個なくして私のみ在り」……欲望無限の60年です。「特攻」も美化するなと言い、今なお、「顕彰の字のない、慰霊と平和祈念」がせいぜいです。

ある戦争未亡人の、平成17年の靖國神社の献歌ですが、「かくばかり　醜き国になりたれば　捧げし人の　ただに惜しまる」に同感です。一度、堕落した自覚のない人々が再生するには、何年かかるか判りません。皇室と共に来た日本人が、武家政権から明治維新を迎えるまで７００年かかりました。その思わぬ発端は「国学」でした。それが人々の日本の再発見となり明治維新へ。さらに海外思想も取り入れ立憲君主政体になり、世界での近代日本の発展の本になりました。しかも歴史は、各国の栄枯盛衰の事実を冷酷に告げ、「満つれば欠く」が原則です。価値なきものは滅び、今の日本では再生の日の前に滅亡しかねませんが、それは自業自得です。

「ONE FOR ALL, ALL FOR ONE」（一人は皆のために、皆は一人のために）……これは近頃のサッカーの合言葉にあるそうですが、まあ、当分は口当たりの良い英語でも使い、スポーツの合言葉くらいから始めてはどうでしょう？大衆自らの行動から精神が生まれるでしょう。いつか、国家の危急の際に子孫のＤＮＡが、我々の特攻精神を発揮させるかもしれません。アテにはなりませんが、せめて期待したいですよね。

――今日は貴重なお話をありがとうございました。

（……了……）

※注１・「館林の空　第三十戦闘飛行集団　館林集成教育隊」は、当時、機数では日本最大の、機種も優秀機ばかりの、特攻基地の記録を平成14年に残したものです。文章２００頁、資料68頁、写真２５６枚。４５０部を３５００円で完売。その後はＣＤで１枚１０００円で分けています。館林市立図書館では複写に応じてくれたこともありました。（堀山氏談）

堀山　久生氏（第194振武隊長）軍歴

1923年（大正12年）６月	三重県宇治山田市で生まれる。
1941年（昭和16年）４月	陸軍予科士官学校入校。
1942年（昭和17年）10月	陸軍士官学校入校（陸士57期）。
1944年（昭和19年）４月20日	陸軍士官学校卒業。航空転科。
1944年（昭和19年）４月21日	陸軍航空士官学校入校（第96期召集尉官操縦学生）。
1944年（昭和19年）９月19日	陸軍航空士官学校修業。
1944年（昭和19年）９月26日	明野教導飛行師団附（昭和19年度第２次乙種学生）。
1945年（昭和20年）３月30日	修業。作戦補充要員。
1945年（昭和20年）５月23日	第30戦闘飛行集団隷下・仮編決と号第194飛行隊長。 同日飛行第47戦隊にて振武隊を編成。
1945年（昭和20年）６月３日	館林に移動。館林集成教育隊にて四式戦を受領、特攻訓練開始。
1945年（昭和20年）９月27日	復員。

東日本大震災で活躍した自衛隊を讃える長歌（七五調）と短歌

田中　賢一

十万の将士出動し　一令のもと行動す
春撩乱の花の日も　秋蕭条の月の夜も
鋭心磨き　只管に　鍛えし腕我が精神
過ぎし戦に先輩の　示せし心受継ぎて
靖國の神に応うべし

先ず緊急は救助なり
水なお残り廃屋に　取残されし人々を
救出せしは二万人
天皇陛下お言葉の　救援組織の冒頭に
自衛隊あり感涙す

（おことば）自衛隊、警察、消防、
海上保安庁を始めとする国や地方自
治体の人々、諸外国から救援のため
来日した人々、国内の様々な救援組
織に属する人々が余震の続く危険
な状況の中で日夜救援活動を進めて
いる努力に感謝し、その労を深くね
ぎらいたく思います。

津波に耐えた建物に
　助けを求む人ありて
ヘリコプターは活躍す
　新たにできた水流に
身動きならぬ人の群れ
　浮曩舟にて助け出す
腰までつかり隊員は
　春さきの水寒けれど
年寄を背負いてゆけば思うかな
　我がふるさとのたらちね如何に

救出終り遺体探し　瓦礫の下や海の底
雪や雨にも休みなく　遺体求め懸命に
玉の緒断ちし人々の
　無念の思い察せらる
瓦礫の除去も心して
　遺体傷つくと按じつつ
被災者の貴重なる品あらば
　丁寧に扱う心遣い
海深ければ潜水の特技者出でて担当す
陸海空の全装備全特技者を挙げて戦う
遺体あらば敬礼し担架に乗せて収容す
子供の遺体我が子思いて涙して
　だき抱えて運びゆく
収めし遺体万を越す
　身内にも犠牲者あれどかへりみず
　任務絶対我れ自衛官

家失いし人あまた　民生支援急務なり
使慣れたる野外用　炊飯器械ふる稼働
温かい飯は罹災者我々は
　乾パンにても活力は湧く
握り飯作りて配る避難所に
　野外炊事の慣れたる手つき
水道破損水絶えて
　自衛隊水トレーラーが活躍す
給水支援続けつつ　野外浴場開設す
男女二組開設し　何日ぶりか避難民
笑顔を見れば我嬉し
民生支援は広地域
　ゆき渡らざる如何にせん

陸海空の自衛隊　緊急輸送に協力す
緊急補給あらばこそ
　補給絶ゆれば命絶ゆ
応急道路の開設に
　夜に日をつぎて奮闘す
原発事故に取組むは
　目に見えざる敵なれば
覚悟新たに打向かう
困難に今こそ向かうこの体
　み国に尽くすわれ自衛官
原発事故故郷離れし人々に
　あわれ思うも為すすべもなし

災害の初動は天災そのあとは
　すべて人災菅直人発
災害を延命に使う菅総理
　何と大きな負の遺産かな
有言で不実行の野田総理
　右顧左眄する民主党内
政治家は三流なれど自衛隊
　精神練度超一流

東日本大震災で知る「大御心」

田中　賢一

国難に遭ひてしきしますめろぎの
　います国なることぞ知りぬる
震災の五日後テレビの玉音に
　全国民の心は一つに
震災の被災者なごむみ心を
　テレビで拝す深きおことば
ひざまずき被災者励ます両陛下
　姿とふとし我がおおやしま
二万余の逝きにし人の在りし地で
　黙祷捧ぐみ心とふと
国民をおおみたからと仰せらる
　みかどの言葉古くよりあり

「劇団エアースタジオ」公演

去る7月27日から31日まで、新国立劇場で劇団エアースタジオの公演「戦後66年を飛び越えて　MOTHER～特攻の母　鳥濱トメ物語～」が上演された。

「MOTHER」は、知覧を舞台にした軍指定食堂のおかみ・鳥濱トメさんと特攻隊員・その家族や周囲の人々・そして終戦後、知覧に進駐して来た米海兵隊員達との交流を描いた物語である。国境も言葉の壁も越えて『母』と慕われたトメさんのエピソードも採り入れ、米兵は外人の役者さん達が演じている。今回で3度目の東京公演となり、今年は地方公演も行われた。

主演の大林素子さんは、初演（2009年）からトメさん役を演じている。バレーボール選手として大活躍された大林さんとトメさんのイメージが、どうしても繋がらないという声を多く聞く。確かに見た目はそうかもしれないが、初演からずっと関らせて頂いている私の目には、舞台上の大林さんのお姿に〝鳥濱トメさん〟を重ねる瞬間がある。

大林さんは、トメさんを演じるにあたり、ご自分の足で知覧を訪ね、ゆかりの地を歩き、熱心に戦史の勉強もされている。稽古場や劇場の壁には、大林さん手作りの知覧や特攻隊ゆかりの地のレポートが貼られていた。そこにはトメさんへの敬愛のお気持ちと「伝えたい」という使命感が、溢れんばかりに詰まっていると感じた。

「MOTHER」の公演は、これからも続いていく。脚本・演出を手掛ける藤森一朗監督はじめ、役者さん・舞台を作っている方々の『真実を後世に伝えたい』という熱いメッセージの籠もった舞台を、多くの日本人に観て頂きたい。

劇中で使われている遺書は、すべて本物である。特に最後に映像をバックに流れる遺書、両親を失い、兄妹二人きりになった特攻隊員が、出撃の前に独り残していかなければならない妹宛のメッセージは、毎回読む度に涙が出てしまう。是非劇場に足を運んで、特攻隊員の心情に我が心を重ねる機会として頂ければと思う。（倉形桃代記）

特攻隊員の母親役を演じて

女優　宮澤　有

特攻隊については、少しの知識をもってこの舞台にのぞみました。本を読み色々な事を調べるうちに、皆さん笑って特攻出撃したということは正しくない事や、残された周りの方達の悲しみを知る事になりました。

私が演じさせて頂いた川谷清子は九州の家族で、特攻に出すという前の日に、面会に行った息子から、気に合わない娘を嫁として認めて欲しいと懇願されます。何処にでもあるお話でもありますが、明日息子は出撃して二度と戻って来ない、これが何処にでもある話と違うところです。

清子の役づくりとしては、まず自分の家族への思いを見つめ直してみました。子供を持った事のない私にとっては、自分の母ならどうしたろうかと考えたりしてみました。それを川谷家の清子の思いと重ねて、役に近づく準備をしていきました。

父親と息子が争うシーンでは、戦争がなければこんな理不尽な争いもなかったのにと思うと、父と息子がとても哀れでならず涙が止まりませんでした。そして婚約者に対しては女性として、運命の人と出逢い幸せになろうとしているのに、戦争の為にそれもできずという部分で共感できるところもあり、母親として「別れてくれ」とお願いするシーンでは、胸が張り裂けるほど辛い気持ちになりました。普通の親子や夫婦であろうとしている人達を、戦争は不幸に巻き込んでしまいます。特に自分のお腹を痛めた子供、大切に慈しみ育てた子供を、死ぬとわかっていても送り出さなければならなかった母親の気持ちを思うと、文字や言葉では表現できません。辛すぎます。

あの時代を、母達はどう耐えて乗り越えたのでしょうか。その悲しみを推し量る事は、私にはできません。ただ、今の私達が特攻隊の皆様達を忘れないよう、一生懸命ひとりの母親の役を演じさせて頂きました。合掌。

◇　◇　◇

※宮澤有（みやざわあり）さんが演じられた川谷清子は、第五十一振武隊員・川谷渉少尉のお母さんです。川谷少尉は、特別操縦見習士官一期生で、入隊前は教師をしていました。婚約者・綾子も同じ教師でした。

死ぬと決まっている息子と一緒にさせる訳にはいかないと結婚を反対した川谷少尉のご両親のお気持ちは、若い身で未亡人になる綾子の将来を慮っての事だったと思いますが、すぐそこに今生の別れがあると解っていても夫婦になって、魂だけは共に連れ添いたいと願う二人の気持もよく解ります。

「MOTHER」には、3人の『お母さん』が登場します。それぞれ形は

違いますが、子供達の幸せを願い無償の愛を与える母親の姿は、いつの時代も不変のものだと、同じ母親という立場から、この舞台を観る度に感じています。

（倉形桃代記）

特攻隊から学ぶ今

会員　村中　美香子

ＭＯＴＨＥＲを見ながら強く思ったことがありました。２００７年秋に８年振りに一人でヨーロッパを訪れた時に思った事と同じでした。大きくわけると、この三点です。

■世界からみたら、日本の国力が以前よりも落ちている。いずれ日本に違う国の旗が立つ事になったらどうしようという恐怖感。

■先人たちが時代をつなげて来てくださったのに、その先人たちに恥じない世の中になっているだろうかという情けなさ。

■今出来ることを今を生きる人がやらなければいけない。自分は今何をするべきなのかという責任感。

この事からより強く日本について考えるようになりました。

私たちは「戦争はいけないこと」「日本は、悪いことをした」と教えられ育ってきたため、戦争はいけないことだということをよく知っています。しかし、戦後教育の中で守られすぎた私たちは自分の国の誇りも自分の身を守る術さえも失い、戦争は昔の事で起こらないと思ってきた人、また思っている人も多いです。過去のいいとか悪いでなく国を守ってきてくださった方々がいることを知り、そのことに感謝しなければならないと私は思います。

舞台の中で特攻隊の台詞に「沖縄をとられたら本土に上陸される」「我々が守らなければ」という言葉がありました。知覧から飛び立った特攻隊は沖縄を護り、国を護るために戦ったのです。

特攻隊が間違っていたかどうかは後世の人間が判断し批判することではなく、特攻隊により命を捧げ、国を守ってきてくださった人たちの思いを受け継ぎ誇りある国をつくることがあとに残された人がすることだと舞台から感じました。

戦後すぐは、特攻隊のお世話をされていた富屋食堂のトメさんのお店も特攻隊で亡くなった方々も批判され、けがらわしいなどと言われた時期もありました。トメさんは彼らの生き抜いた精神をむだにしない生き方をされ続けました。私は舞台を泣きながら見て、しっかりしなければと思いました。戦わなければならない歴史を刻まないように私たちはしっかりと今を生きなければいけません。それは、家族を大切にし、絆を深めること。友達を思いやること。感謝の気持ちと優しさをもって自分と周囲を守る力を持つこと。今、なぜ自分がいるのかという命の繋がりを感じ、積み重ねてこられた歴史を感じ学ぶこと。戦争はよくない、戦争は昔のこと。その考え方から一歩前進しなければならない時代です。

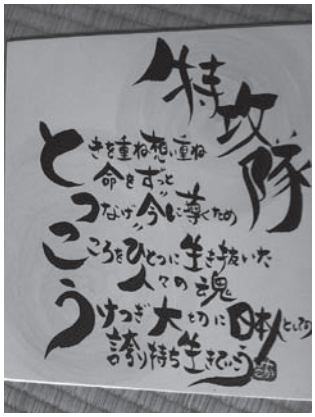
かつて、日本にはこんな時期があった事実とそのときに「今」を作り出すために懸命に生き抜いてくださった方々がいることを忘れてはいけない。

日本人には素晴らしい精神があります。大丈夫と信じているからこそ私は自分が伝えられることを自分の言葉で届けていきたいと思います。今をつくってくださった全ての先人に感謝して…。

《経歴》

ポエムピクチャーアーティスト／折り句作家　ＭＩＫＡＫＯ

１９８１年山口県生まれ。短大時代イギリスへ留学、ストリートアーティストに感銘を受ける。「私もどこかで誰かの力になりたい！」と強く思い、帰国後19歳で路上詩人デビュー。卒業後就職し、ＯＬの傍ら創作を続け、個展や県外での活動も行う。２００６年３月「君は無限」出版を機に独立。ポエムピクチャーの他に、その人の名前で詩を書く「折り句（おりく）」やデザイン等を手掛ける。国内はもとより、韓国ソウルで店舗ディスプレイを手掛け、中国重慶市での展示会、ＮＹ・パリ・ロンドン等でも活動を行う。世界16カ国を歩き、日本文化や大和言葉なども学びながら、２００９年10月より東京に拠点を移し活動中。



「粟野敦子・創作人形展」について

専務理事　藤田　幸生

ある日、読売新聞の千葉版に、知覧の特攻平和会館を訪ねた人形創作家が感動し、以後その感動を胸に、意欲的な人形創りに励んでおられるとの記事が載りました。

この新聞記事を頼りに、いすみ市にお住まいの粟野敦子さん宅をお訪ねしました。そのときは、お人形には対面できませんでした。山形で展示会を開くとのことで、そのときお訪ねしようと思いました。しかし展示会は、東日本大震災の発生で中止になりました。

その後、9月上旬に秋田で開催されるとの連絡を戴いたので、家内と共に一泊二日旅行で出かけました。特攻勇士の像を奉納した「能代八幡神社」への初参拝もしたかったのです。

初日のオープン時間に合わせて、13日9時半に会場に伺いました。オープンニング・セレモニーもなく、祝賀のお花も無い質素な展示会でした。作者の粟野さんご本人は、未明から早朝まで飾付けをされたので、午後から会場に来られるとの事でした。とにかく先ず、お人形を拝見したいと会場に入りました。

質素な会場内に、お人形達は、何の飾り気も無く並んでいました。ところが、その人形たるや、雛人形くらいの大きさながら、一体一体、一組一組、まるで、命が通っているような所作仕草で、佇んでいたのでした。

入り口には、以下のような作者の想いが「ごあいさつ」と言う形で掲示されていました。

「ごあいさつ

私の心と手によって生まれた童（人形）達が、皆様に見ていただける機会に巡り合えた事を感謝いたします。

布切れや美しい包装紙、石ころや貝殻などありあわせの物で、自分なりの何かを作ったり、少女画等を描いたりすることが好きな子供でした。

50才も半ばの頃、人形教室があることをテレビで知り、その時から私の人形作りが始まりました。

無我夢中で作り続けているうちに、いつの間にか私の人形ファンの方や人形を買い求めて下さる方も増えて、華やかなもの、気を衒う、一見人目を引き、買ってもらえるものを作る事に腐心した時期が過ぎ、心の支えであった父の死、自身の目の病なども重なって、そんな人形作りに意味を見出せなくなってしまいました。

そんな折、気分転換にと、夫から九州旅行に誘われ、旅の途中に立ち寄った「知覧特攻平和会館」で、今まで感じたことの無い強い衝撃を受け、それは何ヶ月過ぎても消え去らない、人生観を変えるものでした。

それから再び私の人形作りが始まったのです。

人に阿るためではない真心こめた人形作りに切り替えた時から、作風はガラリと一変し、人目を引いて観てもらう人形、買ってもらう人形から、そこにあっては目にも止まらない地味で小さな人形だけど、一度止まって人形と対峙したとき、人の心にぬくもりと癒しを感じてもらえる、そんな人形を『一体でも作れたら良い』という思いで作り続けています。

人形創り人
粟野敦子」

草履や着物の帯、指の一本一本、髪の毛の生え際など細かいところまで丁寧な手作りで、肌のぬくもりや息遣いまで感じられるようなお人形達は、粟野さんの手を介して、特攻隊の隊員達から命を頂いたように感じられました。それはまさに、最後に目蓋に描いたであろう家族であり、友達であり、故郷の姿なのでしょう。物言わぬお人形ですが、その前に佇み、対面しているだけで、特攻で戦没された方々と、語り合っているような気持ちにさせられました。

会場を二巡した後、入り口に回ると、粟野さんご夫妻が立っておられました。感激をお伝えし、お祝いを申し上げて会場を後にしました。

感激醒めやらぬ間に秋田から能代に移動、雨の中、能代八幡神社を訪ねました。社務所に立ち寄り、特攻顕彰会からのお布施を奉納、淳城宮司にご挨拶し、御案内を頂いて特攻勇士の像に参拝しました。像は、雨の中に静かに佇んでいました。

宮司さんに、今後のことをよくお願いして帰途に着きました。

今回の秋田への旅は、忙しい旅になりましたが、充実した実りの多い旅でした。

粟野さんの人形展は、10月13日から11月13日までの間、北鎌倉にある「北鎌倉古民家ミュージアム」で、以下の通り開催されます。是非一度、このお人形達に会いに行ってください。私ももう一度、是非会いに行きたいと思っています。

心のふるさと　粟野敦子創作人形展　in 北鎌倉古民家ミュージアム

～昭和の人形たちが鎌倉へ～

帰ろうよ、心の中の故郷に。

どんな人にも、心の中に描くふるさとがあるような気がします。「ふるさと」という言葉は、心の支え、ぬくもり、癒しの代名詞ではないかと思えるのです。

私の人形を見てくださる方がこの子供（人形）たちと目と目を合わせ、心と心を共鳴させて「ふるさと」にほんのひと時でもこころを遊ばせて頂けたなら、この上ない幸いと存じます。

作者　粟野敦子

開催日　平成23年10月13日～11月13日
10時～17時（月曜定休　祝日の場合は翌日）

会場　北鎌倉古民家ミュージアム（旧　鎌倉古陶美術館）

住所　〒247-0062　神奈川県鎌倉市山ノ内392-1
ＪＲ北鎌倉駅西口より徒歩2分

料金　大人500円　中高生300円　小学生200円
※まいぷれ鎌倉を見たで入館料100円引き

連絡先　ＴＥＬ：0467-25-5641
SHOPページ　http://kamakura.mypl.net/shop/0000031716 1/?hid=44183

人形に籠めた慰霊の心

評議員　倉形　桃代

10月13日から1ヵ月間、北鎌倉古民家ミュージアムで「心のふるさと　粟野敦子創作人形展」が開催されている。

先日、藤田専務理事と『人形創り人（にんぎょうつくりびと）』粟野敦子さん宅（千葉県いすみ市）にお邪魔して、お話を伺った。今回の人形展に出展されている人形達は、粟野さんにとって特別な『子供達』だ。

粟野さんは、50代に入ってから人形作りを始められた。以来、人気作家として創作活動をされていたが、心の支えであったお父様が亡くなった事やご自身の目の病をきっかけに、これまでの創作の在り方に意味を見出せなくなってしまった。そんな折、気分転換にとご主人・司さんから誘われた九州旅行の途で、知覧特攻平和会館を訪ねた。展示された若き特攻隊員の御遺影や遺書・遺品の数々に接し、粟野さんは『今迄感じた事のない強い衝撃を受

け、それは何ヵ月過ぎても消え去らない、人生観を変えた出来事』を体験された。それ以来、亡くなった特攻隊員の御霊をお慰めしたいとの強いお気持ちと祈りを籠めた作品群『追想』の創作が始まった。人形達は、特攻隊員の方々が最期の瞬間に脳裏に描いたであろう故郷の情景、幼い日に友達や兄弟と遊んだ楽しい想い出、幸せだった日々の出来事をモチーフにしている。

粟野さんの作品は、ふと傍らに降りてきた英霊の魂が心に語りかけてくる物語を題材にされている。設計図は描かず、浮かんできたイメージにタイトルを付けて、物語の文章を作ってから作業に入るそうだ。粟野さんが、アトリエにあった『これから生まれて来る子供』の頭部を見せて下さった。大まかに形を作ってから、何度も細かい手直しをされ『子供達』は産声をあげる。粘土・特殊な木の粉・針金等で本体を作り、ちりめんを張り温かな肌の質感を表現している。着せる服や小道具も、全て手作りだ。着物で隠れてしまう見えない体の部位も、丁寧に作る。いい加減に作ると、服を着せた時に自然な体のラインが出ないそうだ。服以外の小道具も、細部まで手をかけて丁寧に作られる。現在、四十七シーン・百四十余人の『子供達』が生まれ、見る人にそれぞれの物語を語り掛けている。秋田で開かれた個展で、実際に見た事がある藤田専務理事は「子供たちの眼差しがとても良い」と仰る。個展には延べ五千人が訪れ、中には涙を流していた若いお母さんもいたそうだ。残念ながら、私自身はまだ実際に彼らと対面していない。でも写真を見せていただいた時、私も『子供達』の生き生きとした表情・佇まいに強く心を惹かれた。この子達と直に会い目を合わせて語り掛けて来る物語に耳を傾けたいと思った。

ここに、数多くの写真の中から特に私が心を揺さぶられたシーンの写真をお借りしたので、添え書きと合わせて紹介させて頂く。

『ぬくもり』（写真-1）

人生の岐路に立った時　母のぬくもりとふる里の空が　少しの寂寥感とともによみがえる（・・・・・）やがて運命を受け入れる勇気が胸をいっぱいにする

『赤い糸』（写真-2）

結ばれるはずの目に見えない運命の赤い糸があるのなら　たとえ、この世でかなわなくても、その人と、せめて天国で結ばれたい（文章／粟野敦子）

粟野さんは「特攻隊員の方々は志半ば・人生半ばで亡くなったけれど、今は人形として生まれ変わって幸せな想い出の中に居るんだねという気持ちを持って『子供達』を見て戴きたい。目と目を合わせ、心と心を共鳴させて、自分の心の中にある『ふるさと』に、ほんの一時でも心を遊ばせ、温かな気持ちになって戴ければと思っています。そして会場に足を運んで下さった方々に、特攻隊員の『無私の精神』利己でない『利他』の心の美しさも感じて戴ければと願っています」と、個展に籠めたお気持ちを語られた。

私が二十歳の頃、ある予備学生出身の航空兵の手記を読んだ。その一節が、三十年たった今も、深く心に刻まれている。

『静かな黄昏の田畑の中で、まだ顔もよく見えない遠くから、俺達に頭を下げてくれる子供達のいじらしさに強く胸を打たれた。本当にこのような可愛い子らの為なら、命も決して惜しくない』という大意の文章で、当時とても感動した思い出がある。粟野さんの作品を拝見した時、この黄昏の情景と航空兵の美しい決意を、ふと思い出した。

北鎌倉のミュージアムで、粟野さんの『子供達』に会える事を楽しみにしている。そこではきっと、人形達に静かに寄り添っている特攻隊員の方々の魂に会えるに違いないと思うから・・。

海軍第14期飛行予備学生に聴く
―聞いておこう薄れゆく戦争の記憶―

理事　廣嶋　文武

去る5月22日（日）午後世田谷区北沢の北沢タウンホールにおいて、私もその相談役として関わっている「北沢川文化遺産保存会」の主催により開催された第4回「戦争経験を聴く会・語る会」に参加しましたので、その模様を紹介させていただきます。

司会は、きむら　けん氏（作家・主催者主筆）で、戦争体験者として、学徒出陣をされた次の8名の方々が参加されました。

阿山　剛男氏（早大・百里原空）
佐竹　一郎氏（東大・801空）
浦河　浩氏（東大・航空本部）
手塚　久四氏（東大・谷田部空）
上島　茂雄氏（法政大・百里原空）
酒井　保男氏（日大・光州空）
加藤　成康氏（立大・大井空）
江副　隆愛氏（上智大・百里原空）

まず、学徒出陣の話題を提供されましたが、テレビでは、大東亜戦争中昭和18年10月21日、神宮外苑での出陣学徒壮行会・雨中の行進が放映されて、誰もが記憶しており、来年度からの中学校歴史教科書にも、ある出版社の教科書には、特攻機を見送る女子挺身隊員と学徒出陣壮行会の写真を掲載していますが、これは、徴兵猶予の特例を定めた勅令の廃止により、全国の文科系学徒（大学・高専生）が陸海軍に徴兵され（陸軍7万人、海軍3万人）ペンを銃剣に替えて出陣されたものであります。出陣学徒を送る壮行会の記念碑は、海軍の第14期飛行予備学生が中心となり、第13期生の有志もこれに協調して、次世代の人達への伝言として「出陣学徒壮行の地」と銘記され、神宮競技場マラソン門の側に史跡として建立され、毎年10月21日に集まって往時を想起しているとのことでした。

海軍に入団後は、操縦・偵察・要務の各分野で、悪条件を克服して、厳しい教育、月月火水木金金と休みなしの猛訓練にも耐えて所定の課程を終え、海軍士官として約2年にわたり各地で活躍されたのでした。

訓練中に殉職された戦友のことを語り、この戦争により、アメリカとの国力、軍事力の差を知り、これまで学んできた色々な面でのギャップを学び、学徒出身としての苦悩を経験した、と交々話しておられました。

終戦後母校に復学され、卒業後は各界で大活躍をされて、齢既に90歳になられるのに、青年のように若々しく見受けられ、しかも約2年間に培った海軍魂だけは忘れることなく今日まで生きてきたこと、海軍教育の「五訓―至誠に悖るなかりしか・・・」「五分前」等々を座右の銘とし、人生訓として今日まで生きてきたこと、「若者よ靖國神社に参拝せよ」「何よりも命を大切にせよ」と呼び続けていること、「特攻は志願かと問われても、ノー」ときっぱり言ってきたこと、等々を話されました。

同期生3323名中、戦没者411名、特攻隊戦没者163名で、当顕彰会の資料によると、14期生最初の特攻は、菊水一号作戦により昭和20年4月6日、鹿屋基地から出撃した第1七生隊の爆戦12機中の8機で、植木平七郎少尉（明治大）、松藤大治少尉（東京商大）、本庄厳少尉（明治大）、橋本哲一郎少尉（九州帝大）鷲見敏郎少尉（大阪商大）、河野正男少尉（神戸商大）、久保田博少尉（明治大）、吉村信夫少尉（東洋大）の8名でした。

謹んで御冥福をお祈りいたします。

近現代史研究会（PandA会）に参加してみませんか？

理事　笹　幸恵

今から2年ほど前、私は近現代史研究会（PandA会）を立ち上げました。戦争体験者の方々にお話をお伺いする「聴講会」と、国内の戦跡地や資料館をめぐる「フィールドワーク」が会の活動の大きな柱です。10代～80代という、幅広い年齢の方が参加されています。

この会を始めたきっかけは、同世代を中心に意外と戦争に関心を抱く人が多かったことです。しかし彼らは、一様にこう言います。

「興味はあるんだよ。でも、何から勉

強していいかわからない」

確かに大東亜戦争について知りたいと思っても、どこから始めていいのかわかりません。専門用語もちんぷんかんぷん、どこかの海戦の戦闘経過を紐解いてみても、少しもアタマに入ってこない……。

もっと気軽に戦史に触れることはできないだろうか。かしこまった場ではなく、どんな素朴な疑問でも恥ずかしがらずに手を挙げて質問できるような場を作れないだろうか。そう考え、近現代史研究会（PandA会）を立ち上げました。

この会の特徴は、「あの戦争で何があったのか」を真摯に学びたい人たちの集まりであるということ。そのため、参加には職業も年齢も問いません。過去と向き合い、国のために命を賭した人々に心を寄せる、そしてそれを一人ひとりが未来へと生かしていくこと。そんな会であることを目指しています。

戦争体験者のお話を伺う「聴講会」は、2ヵ月に1度、六本木の会場で行われています。9月に開催された第16回聴講会では、憲兵曹長としてビルマ戦線を戦われた磯部喜一先生をお招きしました。講義の冒頭、先生はこうおっしゃいました。

「私は先生ではありません。今日は戦友たちの代弁者として、この場に参りました」

そして、あらかじめまとめてくださっていた資料をもとに、憲兵誕生の経緯、憲兵になるための条件、具体的な仕事内容、またビルマでの戦闘について語ってくださいました。

実際に軍隊を経験された方には当然のことであっても、戦後生まれの私たちには初めて知ることがたくさんあります。たとえば憲兵は陸軍にしかなく、しかしながら「軍隊の警察」として、海軍の規律維持にも関与していたこと。磯部先生の場合は、当初、横須賀に勤務していたので海軍との付き合いが多かったとおっしゃっていました。そして憲兵として任務を遂行する際の関係法規には様々なものがあります。憲法や刑法は言うに及ばず、軍規保護法、治安警察法、治安維持法、兵役法、国家総動員法……等々。これらをすべて頭に入れて、任務にあたらなければなりません。

さらに磯部先生は、外地勤務を自ら希望し、シンガポールを経由してビルマへと向かいました。昭和19年5月、バーモ憲兵分隊へと赴任。そこから主に敵前での情報収集を行いました。ときには現地人の格好をして村民に成り済まし、ときには現地人を宣撫して敵の情報を探る。最前線での憲兵の仕事とは、正に「情報にあり」ということを教えていただきました。

最後に、私から質問しました。

「憲兵として日々を送ってこられたことを、今はどのように感じていますか」

すると先生はひと言、にこやかに、こうおっしゃいました。

「本望です」

そして、戦友のために追悼の意を表したいと、講義の終わりに立ち上がって「海ゆかば」を声高らかに歌ってくださいました。

会場からは万雷の拍手。

戦時中を知る人も知らない人も、先生の戦友を思う気持ちをしっかりと受け止めたようです。

休憩後の第二部では、グループにわかれてワークショップを行い、ここでの質疑応答も随分と盛り上がりました。挙げ句に「憲兵が取り調べを行うときの様子を実際に見せていただけたら有り難いのですが」などという意見も出て、私が被疑者となり、先生が尋問するという寸劇（？）まで披露。午後3時から8時半まで、5時間半をみっちりと憲兵について勉強することができました。

こうした具合に、肩肘張らず戦争について学ぶ場は、とりわけ若い世代には不可欠であると考えています。また戦争体験者の方々の生の声をお聞きする時間は、もうあまり残されていません。その意味でも、直接お話を伺うというのは、非常に貴重な体験となることでしょう。

ご興味のある方は是非気軽にお越しください。詳しくはHPをどうぞ。

【近現代史研究会（PandA会）】
http://www.panda1945.net/

寄附金に関する税額控除制度のお知らせ

事務局長　羽渕　徹也

本年（平成23年）7月、所得税法の一部改正に伴い、「租税特別措置法施行令」が改正されましたが、先に公益財団法人に認定された（平成23年1月4日登記）当顕彰会では、同法令改正による税額控除制度の特典を受けるため、内閣府に対し、適用申請手続を行いましたところ、本年8月、内閣総理大臣から「税額控除に係る証明書」の交付を受けましたので、当顕彰会についても、寄附金に関する税額控除制度を適用することが認められました。

これらのことに関しては、当顕彰会のホームページ上にも既にご案内しているところですが、毎年皆様にお願いしております通常の「年会費」及びご好意により頂いております「寄附金」の合計金額が税額控除制度上の「寄附金」として、制度の適用を受けることが可能となりました。

税額控除制度の詳細に関しては、当顕彰会のホームページ又は税務署や市町村等の資料で確認できますが、具体的には、寄附金合計額から2000円を差し引いた残額の40％が税額からの控除金額となります。

なお、当顕彰会がこの制度を適用するに当たっては、この寄附金を運用して事務処理を行っていることから、会費（寄附金）を納入されている会員全員に領収書を発行することは、事務の煩瑣と経費の著しい増加を来しますので、会員全員に領収書の発送はせず、10000円以上の寄附金（会費を含む）を納められた会員の方に対してのみ、自動的に領収書を発行する処理とさせていただきますので、何分ご了承願います。

したがいまして、毎年税務署に確定申告をされている等、年会費のみの納入であっても、領収書が必要な方は、ご面倒ですが、事務局まで電話等で請求してください。確定申告を行う時期までに、年間分の寄附金合計額の領収書を送付させていただきます。

今回の公益法人制度改革のメリットの一つとして、今までの「所得控除制度」よりも、より減税効果を得ることができる「税額控除制度」ですから、確定申告をされる方は、この制度を大いにご活用ください。

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成23年7月1日～9月30日）

（単位千円）

二〇　松本　聖二　一〇　市川　雄一
一〇　内田　太郎　一〇　大穂　利武
一〇　岡田　文雄　一〇　加藤　拓
一〇　鮫島美知子　一〇　滝澤　昭二
一〇　中村光太郎　一〇　降矢　達男
一〇　矢吹　朗　七　新井　有治
七　飯田　正能　七　市来　徹夫
七　川人　盛幸　七　菊池　国光
七　久保　巍　七　嶋本　久代
七　下出　忍　七　鈴木　敏
七　関口　正孝　七　百目鬼　清
七　廣嶋　文武　七　藤井　日正
七　舟津　辰義　七　前田　和秀
七　松本　司　七　山田　治男
七　山根　秋男　五　赤羽　潤
五　氏木　武　五　小原真知子
五　恩田　賢寿　五　坂下　邦弘
五　特攻殉国の碑保存会
五　澤部　泰　五　中村　竹雄
五　林　聖二　五　日高　誠
五　堀江　正夫　五　森　善治
四　新　忠信　四　埼玉偕行会
四　嶋田　節子　四　長岡　暢俊
四　原　武廣　四　前田　哲勇
四　丸井　容子　四　山本　年男
三　久留内　昇　三　寺井　俊一
三　浪川　昭夫　三　三春　仁
三　深山　明敏　三　山本　政親
三　吉田　治正　二　有川　信男
二　出雲　博　二　磯田　健一
二　板垣　正　二　市村　俊夫
二　今井五十二　二　岩瀬　敬子
二　岩見　義信　二　宇井　忠一
二　植田　和男　二　臼田　智子
二　畝田謹次郎　二　大井　重平
二　大川　吉昭　二　大久保武司
二　大谷　安信　二　岡本　巌
二　岡本　久吉　二　加嶋　昭男
二　梶原　次男　二　加藤　寛二
二　川井　孝輔　二　河島　慶明
二　神田　正喜　二　木下　矩武
二　呉　正男　二　腰塚　守正
二　小堀桂一郎　二　駒場剛太郎
二　小宮山玄二　二　齋藤　忠信
二　三河内健作　二　菅原　道之
二　関根　賢治　二　千田洋之助
二　高梨　久義　二　高橋　秀夫
二　高橋　房之　二　高山　友二
二　武居　房子　二　竹田　五郎
二　豊嶋　勝　二　徳田　裕
二　永井　一成　二　永井　勝一
二　中江　仁　二　中島　實
二　中村　家久　二　根木　東洋
二　芳賀　誠治　二　萩原　健一

二　廿日出昭信　二　服部　武志　広島県　西田　光憲
二　原田　太郎　二　藤井　常男　鹿児島県　平和祈念展望台奉賛会
二　日比野臣三郎　二　藤田　典正
二　布施木　昭　二　古屋　七郎
二　星埜　清滋　二　水町　博勝
二　箕輪　敏　二　宮本　了吾　北海道　町井　渉（23・3・20）
二　茂木　昌三　二　百島　祐信　福島県　熱海　元（22・9・22）
二　山口　宗之　二　山本　卓眞　埼玉県　田中　邦男
二　山本　健雄　二　吉田　文尭　千葉県　大津　幹雄（23・4・23）
一　柏　壽　一　香取　信子　中村　八郎（19・8・21）
一　坂上　公成　一　杉浦　喜義　東京都　石原　幸八（23・4・20）
一　津田　治男　一　根本　紘一　伊藤　潔（23・4・19）
一　牧野　道子　今泉　理（23・9・1）
一　Yoshiko Molitor（ヨシコ モリトー）　久保田　喬（23・3・5）
御芳志誠に有り難うございました。　田中　久喜（22・9・30）
◇　◇　◇　長嶺　宏（23・8・5）

新入会員名簿（敬称略）

（平成23年7月1日～9月30日）

茨城県　山本　勝　原　桂子
千葉県　青木　義博　西山　邦夫　本城正八郎（23・7・1）
東京都　秋山美香子　内海　玄　岡田　文雄（20・7・20）
大崎　朝秀　小林　健二　勝又　一郎
佐波　優子　高橋　裕信　内藤　奎爾（22・10・27）
飛澤　新治　中島　尚文　吉田　学（23・6）
根本　紘一　濱田　妙子　古見　哲夫（22・8・31）
原島　淳子　原田里津子　権田　昭二（23・6・21）
肥田木多恵子　藤田　和広　坂井　旦史（22・10・5）
神奈川県　東洋物産㈱　倉井　雄一（23・5・16）
愛知県　森田　禎介　藤本　茂雄（21・2・27）
京都府　猪野　愈　前田　洋（23・4・26）

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

神奈川県　勝又　一郎（23・7・1）
千葉県　内藤　奎爾（22・10・27）
東京都　吉田　学（23・6）
静岡県　古見　哲夫（22・8・31）
愛知県　権田　昭二（23・6・21）
坂井　旦史（22・10・5）
島根県　倉井　雄一（23・5・16）
大分県　藤本　茂雄（21・2・27）
鹿児島県　前田　洋（23・4・26）

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊をお祀りして慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私たちは、彼らからその精神を学び、現在の日本の現況や自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の方のご入会をお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和27年5月設立
平成5年11月財団法人認可
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
三代会長　山本　卓眞　氏
現理事長　杉山　蕃　氏

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・講演会等の開催
・機関誌等の発刊その他

○年会費

・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒105-0014　東京都港区
芝2-5-19　TAビル4階
公益財団法人特攻隊戦没者慰
霊顕彰会事務局
電　話03-5730-1016
FAX03-5730-1017

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒105-0014　東京都港区
芝2-5-19　TAビル4階
（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
事務局
電　話03-5730-1016
FAX03-5730-1017